
幻想にキコエル

浅香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想にキコエル

【Nコード】

N7052V

【作者名】

浅香

【あらすじ】

最高の未来を簡単に想像できた。自分には特別な能力がある。それが自惚れだと気づいたのは、自分以外の能力者に出会った時だ。自分だけが特別じゃない。未来だって、きっと、一つじゃない。そんな簡単なことにさえ気づかなかった過去。その小さな境界を越えた時、僕たちは大人になる。そしていつか、一つの未来しか見えなかったあの頃が、思い出になりますように。その道筋を示した物語には、きつと成長の二文字がよく似合う。

さよなら、子どもたち

なぜ、ぼくだけが。

あまりに儂いつぶやき。土砂降りの中に落ちた一しずくのように、小さな声は喧噪の中に紛れて消えた。

そこは四角に切り取られた飾り気のない空間。ただ広いだけの部屋に何人も人間が詰め込まれている。中央には一人の少年がいて、その周囲には波紋が伝わるように倒れていった数人の子どもたちがいる。集まった人間たちは、恐ろしいものを見ると同じ目で、遠巻きに少年を眺めていた。いや、もしかしたら人々は倒れている子どもにも目を向けていたのかもしれない。

非日常的な光景を目の当たりにして、ごちゃ混ぜになった数多の声は、決して中央の少年に向けられたものではなかった。

騒ぐ人混みの中に、何か起きた瞬間を理解できた者はいなかっただろう。まして、子どもたちを再び目覚めさせる術を知るものは恐らくそう多くない。

少年は立ち尽くしていた。なぜ倒れる子どもたちの中心に、自分は立っているのか。心当たりはある。

少年は見ていた。子どもたちが倒れる瞬間。周りの人々が気づいて、引いていく瞬間。直前に、誰かが落とした言葉だけ、耳に焼き付いて離れない。

ポケモンが、人生のすべてだよね？

その言葉は、子どもが背伸びをして、ちょっとだけ哲学っぽく言ってみただけのように聞こえる。けれど、当の本人にしてみれば本当に、人生の中枢にはポケモンがあつて、それを軸にして世界が成り立っているに違いない。子どもらしく、誰かに同意を求めて問い

かけ、答えることで認めてもらいたかった、そんな意図が読み取れる言葉。子どもたちにとって、嘘も偽りもない真理だった。

少年は知っていた。子どもたちが意識を失ってしまった理由。下手をすれば、少年自身も巻き込まれたって不思議ではなかった。なぜ巻き込まれなかったのか。それも知っている。少年は少しだけ大人だったのだ。倒れた子どもたちよりも知識があつて、広い世界を持っていて、子どもだけでも少しだけ大人だった。夢見ることの限界をある程度は分っていた。だから、自分はここに立っているのだらう、少年はそう思う。

叫び声が聞こえた。泣き声が聞こえた。倒れた子どもたちがいる夢の世界まで聞こえるくらいの悲痛な叫び声が、部屋の中を走っていく。

もしも、子どもたちを目覚めさせる手段があるとしたら。止まない声が少年の背中を押す。お前しかないのだ、と。

確かに自分しかないのだらう、そう思う。

子どもでありながら、ちょっとだけ大人。今だったら子どもと大人、どちらかを選ぶことができる。まだ間に合う。子どもとしての道を進むのか、大人としての道を進むのか。ただしその選択は一方通行だ。子どもを選んだとしても、いずれは大人になる。遠回りするか、しないか、その違いでしかなかった。

もしかしたら助けられるかもしれない。それでも少年の表情は暗かった。選択肢など欲しくなかった。最初から一つの道であればよかったのに。

少年は目を閉じ、子どもとしての道に行くことに決めた。その道はもう、倒れた子どもたちが先を歩いている。

ポケモンが、人生のすべてだよな？

そして、誰かの問いに答える。少年は口をぼんやりと開いて、小さく喉を震わせた。

もう、誰の声も聞こえなかった。

旅をする子どもたち【1】

第一章 旅をする子どもたち

1

大きな木がある。風が吹いていて、葉っぱが多くついた枝を揺らす。音はない。木の影が怪物のようにうねうねと変化した。遠くでは夕日が落ちて、音のない世界を淡い金色に染める。

自分がいて、周りには自分と同じくらいの子どもたち。小さかった頃の思い出。だとして、ここはどこだろう。やけに楽しそうで、記憶の中の少年少女は輝いて見えた。転がっているのはランドセル。その上にあるのはポロポロのノート。きつと、とても大切な物なのだ。ポロポロになってしまっても捨てない。それだけ大切なことが書いてあるに違いない。誰かの宝物であるはずだった。

ケースケ。それが自分。ノートに名前は書いてない。ケースケ。聞こえる。誰かが呼んでいる。音のない世界で自分を呼ぶ声に、耳を傾ける。

ケイ。こつちが名前。ケースケはあだ名だ。ケイ、ケイ。何度も呼ばれる。大丈夫、ここにいる。俺はここにいる。

後頭部を鞆でたたかれて、やっとケースケは目を覚ました。ぼんやりと目を開けて、何も言わずにゆっくりと机から起き上がる。叩いた主を見てみると、予想通りユウだった。相変わらず髪型に特徴がない。中学二年の男子が床屋に行けばこうなるだろう、という量産型の髪型だ。こんな髪はやつは全国にごまんというはずだ。それに加えて童顔。ミドルスクール二年どころか、ミドルスクール生にすら見られないことも多い。いつもワイシャツを着て、下は黒いズボン。ケースケとユウのトレーナーズスクールには制服が設定され

ていないため、その格好はちょっと目立つ。地味なのに、地味すぎて逆に目立つというやつだ。

「ケースケ、もうホームルーム終わったよ!」

教室を見渡してみると、確かに誰もいない。ケースケとユウの二人だけだ。

「じゃあ、帰るか!」

「じゃないでしょ! これから決勝なんだから、早く出る準備しなきゃ!」

はて、何のことだったか。どうも寝ぼけていてついさっきまでのことが思い出せない。よっぽど寝不足だったのだろう。説明を要する。

「大丈夫? そういえば終業式も立ちながら寝てたし、終わりのホームルームもずっと寝てたよね……」

そもそも記憶が曖昧ではなくて、寝ていたせいで夢の記憶しかなかったらしい。終業式は暇だ。だから寝る。眠いし。ケースケはそう考える。

「そーだな、決勝、うん。スクール対抗大会の選抜戦だ。行かなきゃ」

思い出してみると、少々焦りが生まれる。スクール対抗大会の選抜戦で、ケースケは決勝戦まで順調に駒を進めていたのだ。これに勝利すれば晴れてスクール代表トレーナーになれる。そしてスクール対抗大会に出て、優勝すれば今度は地方対抗大会だ。一度も負けなければ、イツシュ代表まで上り詰めることができるというわけだった。

アナウンスが入った。ケースケの呼び出しだ。さすがにこれはまじいと思って、椅子を蹴りながらも慌てて教室を出て行こうとする。「待つてケースケ! これ!」

そう言って放ってくるものは、ヘッドセット。ワイヤレスの特注品。ケースケがバトルする上で絶対に欠かせないものだ。目にかかる程度の前髪を払い、耳にかかった髪を分けて、左耳にヘッドセッ

トを装着する。これで戦いの準備は整った。

「勝つてくる！」

友人に宣言して、教室を飛び出した。

ケースケはたとえ夏でも長袖長ズボンという格好を崩さない。さすがに生地は薄い物を選ぶが、昔から肌の露出に抵抗があった。目にかかる前髪はちゃんとおでこを隠しているから、露出している部分は手と顔と首元くらいしかない。それでも昔から貫いてきたスタイルには慣れていて、夏の気温でもケースケは涼しい顔をしている。しかし、それはいつもの場合だ。今は髪が汗で額に張り付いている。決勝の舞台に立ったケースケは珍しく緊張していた。周りでは外野が勝手に盛り上がっているし、目の前にいるのは学年で一番強いと言われている男子だ。緊張しないわけがない。

合図があって、両者はボールを放る。スタジアムに二匹のポケモンが現れた。ケースケの方はエテポース。対する相手はというと、ヒヒダルマだった。

「ねこだましただ！」

先手を取ったのはエテポース。臨戦態勢に移ろうとするヒヒダルマをねこだまして牽制する。ヒヒダルマが怯んだ。そこにエテポースはダブルアタックを積みかける。それから一度退いて、相手の出方を覗う。

「さすが、決勝まで来てることはあるな！ ヒヒダルマ、フレアドライブだ！」

フレアドライブは反動で自分もダメージを受ける代わりに、かなり強力なダメージを与える大技だ。これをくらってしまっただけは、タイプの相性が関係なくても相当な痛手になるだろう。しかし、それも当たれば、の話だ。

ケースケが左耳につけたヘッドセットのスイッチをオンにする。指

示を受けたヒヒダルマが腰を落とし、地面を蹴った。その瞬間、ケースケの視界が反転する。

左目が見る世界には色がなかった。右目は何も変わらない。ただし、時の流れがゆっくりになっていた。白黒の世界で、ヒヒダルマは動き出す。炎を爆発させて、一気に全身を炎上。そのままの凄いい勢いで突っ込んでくる。その速さは軌道なんて読めたものじゃない。案の定、その世界ではエテボースも避けられず直撃だった。

ケースケがマイクに向かって呟く。「一秒後、右に跳躍」

左目に色が戻り、世界は元通りに動き出した。ヒヒダルマは色のある世界で、フレアドライブを撃ち出す体勢に移るところだ。そして、わずか一秒後。それはヒヒダルマが技を発動させたのとコマも変わらずに同時だった。相手が照準を定め、攻撃を発動するその絶妙なタイミングで、エテボースは跳躍した。あまりにもタイミングが重なりすぎていて、傍目にはエテボースに直撃したように見えた者もいるかもしれない。しかしヒヒダルマが全身全霊を込めた渾身の一撃は、エテボースではなくスタジアムの床を深々と抉っただけに終わった。

「フレアドライブを、避けた……？」

相手が啞然としてる隙にも、ケースケは指示を飛ばす。ヘッドセットのマイクに向けて囁いた。エテボースが指示通り動いて、ヒヒダルマの背後に回る。ダブルアタックをたたき込んで、カウンターを受けないように距離を取った。自分の窮地を悟ったヒヒダルマは丸くなってダルマモードになる。トレーナーからは舌打ちが聞こえた。

ヒヒダルマは指示を受けないうちに攻撃をしかけようとする。

ケースケの左目が白黒の世界を映した。ダルマモードから繰り出されるサイコキネシス。実体のない曖昧な攻撃だ。これをエテボースが防ぐと、今度はオーバーヒート。噴火する火山から撃ち出される火の粉の如く、勢いよく飛び散る火球。それは確かに強力であり、避けづらい技であるが、実体はある。そこに残る僅かな軌道上の空

白。火球が当たらない位置を瞬時に特定して、ケースケは正確な指示を下した。

そうして左目に色は戻り、右目の世界で時の流れが戻る。

まずはサイコネシスを「まもる」でやり過ごし、続くオーバーヒートに備えて、わずかな位置修正。それから回避行動に移る。飛んでくる火球を次々に避け、ヒヒダルマに近づいていく。全部避けきって、ヒヒダルマには隙が生まれた。そこに叩き込む三度目のダブルアタック。ダルマモードのヒヒダルマが力なく宙を舞った。

「なんだよこれ……。くそつ、次はレパルダスだ！」

ヒヒダルマの交代で出てきたのはレパルダス。繰り出そうとしているのはねこだました。しかし、ケースケとそのポケモンにとってはそれすらも回避対象になる。左目が見た軌道の通りに指示を出し、否応なくねこだましを回避する。

「なんで当たらねえんだよ！」

苛立ち混じりの声を無視して、エテボースの得意技、ダブルアタックがレパルダスの背中を打った。

ケースケの戦術は単純だった。避けて、ダブルアタックを叩き込んで、その繰り返し。でも負けない。なぜなら、相手の技はほぼ必ずと言っていいほど避けられるし、繰り出すダブルアタックもダメージを確実に蓄積していくからだ。苛立った相手は冷静さを欠いて元から用意していた戦術を見失っていく。単純なケースケ以上に、単純な行動を取り始める。

そうなってしまうえば、もう勝負はついたも同然。ケースケの勝ちだ。

結局、スクール対抗大会の選抜戦決勝は、ケースケが勝利して終わった。三対三のシングルバトルで、ケースケはエテボース一匹しか使わなかった。どころか、大会を通してケースケはエテボースしか使っていない。それだけ圧倒的な戦いだっただ。元から負けるつもりもなかったし、残り二匹は最初から持ってこなくてもよかった。

らいだ。

校内のアナウンスが高らかに勝利者の名前を読み上げ、それから校長が祝福の言葉をかけてくれる。そうして正式にケースケは勝者になったのだ。

控え室を通り過ぎて、スタジアムの外に出ると、外野があふれていた。校内のチャンピオンになったケースケを間近で見たいのだろう。それには警備員と先生が必死で押しとどめていた。ヒウンシテイのスクールとなると、こうまで大規模だ。大規模であるほど強いというわけではないが、ヒウンシテイの代表ともなればかなりの実力が認められたことになる。

さすがに押し寄せる群衆を乗り越えられる気がなくて、ケースケは校舎側から出ることにした。スタジアムと校舎は繋がっているので、関係者入り口を通って校舎に向かえば問題はないだろう。

かくしてケースケは目論見通り、何の苦もなく校舎に入ることができた。全校生徒がスタジアムに詰め寄せていたため、校舎の中はがらんとしている。遠くでがやがやと聞こえるくらいで、電気の点かない廊下は静かなものである。これも玄関からは出にくいと判断して、ケースケは裏口に回った。

「おつかれ、ケースケ」

裏口から出ようとしたところで、ユウに話しかけられる。

「こっちから来ると思ってたよ」

「さすがにあんな人混み抜けられそうもないからな……」

「あはは、チャンピオンは大変だ」

笑っているユウの後ろには大きな柱がある。そこからひよいと顔を出してきた女の子が居たので、ケースケの視線は思わずそちらに向いた。

「校内チャンピオンのケイさんですよ！ あだ名はケースケで、得意のポケモンはエテボース、好きなパンはハニートースト、あとは……」

勢いに圧倒されてケースケは黙る。チャンピオンを圧倒させるほ

どの女の子だ。さぞかしいかつい外見なのだろうと思いたくもなるが、そんなことはない。長い黒髪を後ろで一本に結わえていて、小ぶりな顔はどこかガーディみたいで人懐っこそうだ。ケースケはクラスで前から三番目の身長だが、そのケースケよりも少しだけ背は低い。それでも細いシルエツトに青のショートパンツとグレーの五分袖パーカーを合わせれば、見た目よりも背が高く見えるし、活動的な印象を相手に与える。

「そう、好きな女の子のタイプが」

「やめる　！　そんな情報どこで仕入れてくるんだ……。てか、君、だれ」

だれ、と言った瞬間、女の子はすごく残念そうな顔をした。

「ひ、ひどいです。確かに私は目立つような子じゃないですけど、せめて同じクラスの子の名前くらいは、覚えていてくれても……」

「ひどいなあ、ケースケ。ああ、ほら、泣いちゃった」

女の子が顔を伏せて両目をこすり始めるが、どう見ても嘔泣きである。

「思い出した、カリンちゃんだ」

「全然違います！　アカリです！」

あ、やっぱり嘔泣きだった。

「それで、アカリちゃんは俺に用でもあったの？」

「いやー、用ってほどのことでもないです」

どうせその大した用もない子を案内してしまったのはユウなのだろう。ちらりとユウの方を見てみると、目を逸らされた。間違いない。

なに？　先を促す。

「えつとですね」

アカリがもじもじとしているうちに、複数の話し声が近づいてくるのが分かった。校舎の奥からだ。裏口から出れば帰路につきやすいという学生も居るから、そういう生徒の集団だろう。ケースケは面倒になりたくなくて、はやく、とさらに促した。

「分かりました、一言で申し上げます！」

好きです！

帰宅したケースケは、いつも帰ってすぐにやる行動を全部放棄してベッドに飛び込んだ。カーテンを全開にしていたおかげで、シートからはお日様の匂いがした。

うつむ、とりあえず唸る。その、つまり、なんだ。告白？ いやいや違う違う。好きですっていう言葉にそんな意味は込められていな……いわけなくて、つまり、告白？

ケースケはめちやくちやに考え始めた。どう考えても告白だった。今まで一度も告白された経験なんてない。それもそのはずだ、と自分では理解できている。

目にかかる程度の前髪は無造作で、そこらを闊歩するイケメンみたいに整えてなんかいない。その割には端正な顔つきだから髪さえ整えれば格好良くなるよね、なんて言われたこともあるが、その髪がなんとかなってないからだめだ。さらに背も低い。クラスで前から三番目なんて、同年代のほとんどの男子より背が低いのだ。これは見事なディスプレイアドバイザー。せめて背があればもうちょっと外見に気を使うようにもなるのだが。そして極めつけは、年中無休の長袖長ズボン。夏だろうが関係ない。色白の素肌はほとんどコンプレックスで、女子にも男子にも美白と言って笑われるのだ。いい加減うるさくなって、いつからか長袖長ズボンを着て隠すようになった。そんなんだからモテることなんてないし、まして告白とか、恋愛とか、そんなのとは縁もゆかりもタケナワもないのである。

そんなケースケが唐突に告白されたらどうなるか。決まっている。ケースケは全力で逃げたのだ。まずは顔が真っ赤になった。ヒヒ

ダルマもかくや。それからコイキングみたいに口をぱくぱくさせて、頭が真っ白になった。目の前にいるアカリが笑って、それが今まで見たどの女の子よりも可愛くて、とうとうケースケは駆けだした。走る背後で声が聞こえる。内容は理解できない。帰路を走る途中、色んな人から声をかけられた気がした。でもまったく反応できなかった。何かがケースケを走らせていた。そして、息を切らして着いたのは自宅。あっという間だった。息を整えて汗が引くまで玄関先に座り込んで、やっと入ってきて今に至る。

うつむ、もう一度唸った。

こんな行動をしてしまつては、やっぱり嫌われるんだろうなあ、とぼんやり考える。はあ。今度はため息が洩れた。喉を通った空気が妙にざらついでいて、そういえば喉が渴いていることに気づく。

ケースケは二階にある自分の部屋から階下に降りて、キッチンを目指した。家に誰もいないと気づいたのは、コップを棚から出した時だ。普段は汗をかいたまま居間のソファに座ると、母親に怒られる。でも今だったら怒ってくる相手もない。ケースケは冷蔵庫から出したモーモーミルクをコップに注いで、居間に入り、ソファにどっかりと腰を下ろした。それからテレビを点けて、ミルクを飲む。いつも以上に美味しく感じるのは、喉の渴きが最高潮だったからだろう。

チャンネルをびこびこといじって、何かおもしろい番組はないかと探してみても、夕方四時では大した番組なんてやっていない。仕方なく年少向けのアニメを見てみると、臨時ニュースのテロップが流れ始めた。

ポケモンセンター襲撃事件。これは三日前に続いて二度目のことだ。襲撃事件は格上げされて、連続襲撃事件になってしまった。フキヨセがやられ、今日でホドモエがやられた。どう考えても犯人グループは左から回ってきている。次の標的がライモンになることは誰にでも予想できるだろう。警備が強化されそうだ。ケースケにとっては直接に関係のあることではないから、どうでもよかった。今

の一番の問題はアカリだ。

いったい、俺はどうすねばいい？

旅をする子どもたち【2】

2

そんなわけで終業式も終わり、スクール対抗大会の代表選抜戦も終わり、無事に夏休みを迎えたというわけだ。朝っぱらから、外ではマメパトが閤延びした鳴き声で会話して、階下では母親がニュースの占いを見て悲鳴を上げている。まさしくその悲鳴で目を覚ましたわけだが、今日ばかりはその悲鳴にもお礼を言いたいくらいだった。時刻は七時。夏休み初日の朝にしては早すぎるくらい。しかし、旅立ちの朝にしてはなかなか丁度いい時間帯である。

そう、ケースケ、本日旅に出ます。

昨日のうちから準備していた荷物はベッドの横にある。部屋もちやんと掃除した。けれど気持ちの整理だけは着いていない。覚悟とかそういうのじゃなくて、アカリのこと。何の返事もせずに旅立つのか、なんて赤面のまま走って逃げ出したケースケが格好つけて言えるもんでもない。

思い出しただけで赤くなりそうな昨日の事件は、とりあえず頭の隅にやって、階下に降り、居間に入った。

旅に出ることを親に相談したのは昨日のことだ。もちろんスクールがあるし、まだまだ子どもなんだからずっと旅に出ているわけにもいかない。夏休み中に帰ってくるという条件付きで、旅に出ることが許された。

なぜだかケースケは近場で遊んでくるかのような感覚しか湧いてこなかった。旅に出るなんていう言葉があまりにも簡単すぎて、現実味が少しもない。それに、たった今「行ってきます」と言っただけだった。親はいつもどおり「行ってらっしゃい」と返した。ただだった。あまりにもいつも通りすぎる。さらには旅の供までもがいつもどおりなのだ。

「おはよう、ケースケ。君にしては早いんじゃないかな？」

ユウだ。旅に出ると言ったら、ついて行くと言ってくれた親友。もちろん目的は修行。その道中でスクール対抗大会に参加していく会場は転々と変わるため、交通機関を使わなければ小さな旅くらいにはなるのだ。スクール対抗大会に優勝すれば、今度は地方代表になる。そうして地方代表大会に出られれば、夏休みを丸々有意義に使えるというわけだった。

「おはよう。旅に出るとなれば朝七時でも余裕だぜ」

主に母親の占い結果が悪かったおかげである。

「悪いけど、君の母さんの悲鳴は聞こえたよ。それまで寝てたんでしょ、どうせ。だって、寝癖ついてるし」

「げ」髪を触ってみると確かに寝癖がついている。無造作な髪に寝癖があってもあまり目立たないが、普段から見慣れているユウからすれば違和感があるらしい。

「まあいいよ、髪くらい。とりあえずさ、まずはライモンだよな？」

「違う。その前に、アカリちゃんの家」

「はい？」

声が裏返った。目もまん丸くなった。アカリちゃんの家？　こんな朝から？　何のために？

「おい、まさか」

「そう、そのまさか。って言ってあげる僕に感謝して」

「アカリちゃんも旅の道連れにするのか！？」

確かに男二人だけじゃ華がない。男子二人に女子一人。旅においてこれ以上の比率はない。でも昨日の今日でそれは……とケースケは勝手に悩み始めた。

「違うよ変態！　昨日の返事してから旅に出るんだよ！」

「変態つて何だよ！　ってまあ、そうだよなあ。旅の道連れにはできないうな」

「落ち込んだ？」

「落ち込んでない！　ほら、行くところ決まったんだから、さっさと

行く」

そう言ったケースケの顔はすでに赤く、それを見たユウがくすくすと笑っている。もちろんケースケは無視を決め込んで、さっさと歩いて行く。

「あ」そこでケースケは気づいた。

「アカリちゃんの家って、どこ？」

昨日が初めてまともに喋った日なのだから、ケースケが住所なんて知っているはずもない。ユウの方は前から結構仲が良かったらしく、ちゃんと住所を知っているようだった。ヒュンストリートを少し入ったところの右手に見えたマンションがそうだ。その五階。なるほど、ユウが知らないはずではないか。ユウはこの六階に住んでいた。所謂近所さんというやつだ。恐らくアカリの恋心を前から知っていて、昨日のように告白の手助けに踏み切ったのだろう。ずっと隠してきたのはさすがといったところだ。

さらにユウの準備は周到だった。エレベーターに乗って五階に下りると、エレベーター前でアカリが待っていたのだ。視線をユウに移すとそっぽを向かれた。またしてもやられたようだ。

ケースケの方は全く心の準備ができていなかったの、固まったまま動けなくなった。アカリは真剣な表情で見つめてくる。ほら、とユウが脇腹をつついた。ああ、と眩きが洩れて、結局何も言えない。

「えっと」

間を取ったけれど、真っ赤になった顔と真っ白になった頭では、次に繋がる言葉を紡ぐことはできなかった。そうしている間にも、アカリの表情は寂しそくに翳っていく。早く何か言わなければ、とケースケは思った。

「あのさ、俺はこれから、旅に出るんだよ」

やっと出てきたのは言い訳めいたそんな言葉だった。

「うん、知ってますよ」

アカリとユウの仲が良かったなら、恐らくずっと前から知っていたのだろう。スクールの代表になったら、旅に出るということを。

「だから、えっと、そういうのはできないっていうか、ああ、もうさ、一緒に来る？」

ユウが豆鉄砲を食らったマメパトみたいな顔をして、アカリは素直に「え」と驚きを表して、なぜだか言った本人であるケースケが一番びっくりしていた。こんなこと言うつもりはなかったし、まして誘うつもりなんて全くなかったのだ。言ってから後悔の念が押し寄せる。

「ありがとう、ケースケさん！」

すごく嬉しそうにお礼を言ってきた。ここまで来たらもう引き返せない。

「でも、残念だけど一緒には行きません」

それを聞いてほっとするケースケ。なぜだろう、ちょっとだけ残念な気持ちもある。

「そっか。そりゃ、そうだよな」

「違うんです。私は私で、旅に出ようと思ってるんですよ」

「え」と、これにはユウが驚いていた。

「旅に出るの？ どうして？」

驚きもそのままに、ユウが聞く。

「私にはね、夢があるんですよ。ほら、これです」

そう言って鞆から取り出したのはカメラだ。焦りすぎていたケースケは、今初めてアカリが鞆を提げていたことに気づいた。カメラはというと、なんだかプロの方が使ってるような、ごついカメラだ。最近流行ってるデジタルカメラみたいに、持つところは平らじゃなくて、小さな取っ手がついている。それに何より大きさが全然違う。カメラの大きさもそうだし、レンズの大きさも全然違った。

「これ、一眼レフです。私、全国のポケモンを写真に収めたいんで

すよ。だから、一緒には行きません。私は一人でポケモンスナップの旅に出ます」

ほんのりと頬を染めて、にっこりとほえんだ。ケースケは何も言うことができなかった。アカリのその決意と、何よりも可愛すぎる笑顔に。

「そっかあ、アカリちゃんも旅にでるのかあ……」

ユウが呟くと、アカリは頷いた。

結局、告白の件は曖昧なまま先送りになった。

一回戦の会場はライモンシティのビッグスタジアムを借りて行うことになっている。一回戦の参加人数が一番多いのだから、イツシユ地方の中心に位置するライモンシティが会場になることも頷けるだろう。

ヒウンシティ出身のケースケとユウにとっては、幸運にも会場は近場であった。まずはヒウンシティを北に抜けて、四番道路へ。左手にリゾートデザートを見ながら、砂埃の被った道に行く。

旅にはトレーナー同士のバトルが付きものである。視線が交差しれば、火花が散る。片方が声をかければ、お互いにバトルの準備をしなくてはいけない。暗黙の了解のようなものがある。

二人の行く手には、女の子がいた。ぱつと見て、同年代ではあるだろうが、背はケースケと同じくらいか、もしかしたら数センチくらい高いかもしれない。足下を見るとおしゃれな白いサンダルで、ヒールの類いではないから身長を高く見せているわけでもないだろう。デニムのホットパンツからは細い足がすりと伸びる。それと白にワンポイントのノースリーブで、中性的な小顔と軽めのボブカットが服装と微妙にミスマッチ。それでも元がいいおかげで、合わないその取り合わせもファッションに見えてしまうから不思議だ。

目が合った。どこかきつそうな視線に、ケースケは思わず怯んでしまう。かと思いきや、その女の子は二人に向かって歩いてくる。周りを見渡しても、二人しかいない。やはりケースケとユウに用があるらしい。

「ねえ」

素っ気ない声がかげられた。反応するよりも早く、女の子は先を続ける。

「あんなたち、トレーナーでしょ？ バトル、しない？」

女の子はトレーナーだった。小さなウエストポーチを腰に巻いている。恐らくボールはそこに入っているのだろう。

「いいけど、俺たち結構強いよ？」

「いいよ。強い方が好都合。そっち二人だから、二対一でいいよね？」

ケースケとユウは顔を見合わせた。いくらなんでも二対一は無謀だ。強い弱いに関わらず、そんなバトルは普通にするもんじゃない。「ハンデよ、ハンデ。私、すごく強いから」

「言うておくけど、俺たちも弱くない。俺はヒュンスクールの代表だし、こいつは代表戦こそ出なかったけど、俺の練習に付き合ってるから、結構強い。お前、そんなに強いなら俺が相手になるけど」

ふうん、女の子は値踏みするようにケースケを見る。

「わかった。じゃあ、あんたが相手になってよ。三対三のシングルバトルでいいよね？ 私、三匹しか持ってないし」

「それでいい。えっと、お前、名前は？ 俺はケースケで、こっちはユウだけど」

ユウがよろしく、と付け足した。

「私は、アイ。よろしく」

夏休みの初日くらいだと、まだ四番道路あたりを歩くスクール生

は少ない。これがもう少し日が経って、そろそろ街から出ようという気になってくると、リゾートデザートで遊ぼうとする子どもたちがちらほら足を運び始める。

朝が早いこともあって、四番道路は人通りもほとんどなく、シングルバトルには打ってつけの戦場になった。

向かい合うケースケとアイ。ケースケがボールを投げると、アイもボールを投げた。エテボースが光を突き破って道路に降り立ち、対するアイのポケモン、コジヨンド。相性では圧倒的に不利。だが、ケースケの戦術では相性などほとんど関係ない。攻撃も当たらなければ意味がないのだから。

「ジャッジは僕がするね。それじゃ、バトル開始！」

ユウの掛け声で二人のバトルが始まった。

ケースケは戦術通り、手始めに「ねこだまし」で攻撃する。相手のコジヨンドも同じように「ねこだまし」で攻撃しようとしたのだろうが、素の速さではエテボースが勝る。攻撃のぶつかり合いは、まずエテボースが制した。それから二匹とも一端退き、にらみ合う。ケースケの場合、次は回避行動だ。回避から相手の隙をついてのカウンター攻撃。まずは動いてもらわないと始まらない。

「が、相手は一歩たりとも動かなかった。」

「どうした？ もう怖じ気づいたのか？」

ケースケには珍しく、挑発で相手を誘う。

「そっちこそ、怖くて攻撃ができないんでしょ？」

アイも挑発に挑発で答えた。

再びにらみ合いが続く。やがて、しびれを切らしたアイの方がコジヨンドに指示を出した。とびひざげり。その技は当たってしまった。ならば、ノーマルタイプのエテボースには致命傷だろう。走り出したコジヨンドの後から砂埃が追いかける。かなり速い。けれど、ケースケの前ではそれも無意味。そのはずだった。

「なっ、エテボース、避ける！」

慌てすぎてまともな指示が出せなかった。その理由はただ一つ。

どういうわけか、いつものようにケースケの不思議な能力が発動しない。

何が起きている？

エテボースが間一髪のところまでコジヨンドの攻撃を避ける。これが当たりにくい技じゃなかったら、まともな指示を受けられなかったエテボースは倒れていたかもしれない。

とにかく今はチャンスだ。マイクに向かって指示を出す。地面に突っ込んだコジヨンドに向けて、エテボースがダブルアタックを叩き込む。鈍い打撃音が早朝の空の下に聞こえた。衝撃に波紋のようにして吹き上がる砂埃。耐久力のないコジヨンドにはかなりのダメージを与えたはずだが、攻撃を受けたコジヨンドは耐えて身を翻し、態勢を整えるために一度アイの元に戻った。

アイを見てみると、驚愕に目を見開いている。避けられることがそんなに珍しいことなのか、と考えるケースケも胸中は穏やかではなかった。いつもの能力が発動しない。戦術が使えない。知らず流れた汗が目に入った。目を擦ってみても、世界は変わらない。普段から能力に頼りすぎていたことを思い知らされた。奥歯を噛みしめる。

「ねえ、あんた、何者？」

そんなことを言われても、そう聞きたいのはケースケの方だった。

「お前こそ何者だよ」

まさか、と言ってアイは思案し始める。

「あのさ」

それからアイは口を開いた。

「もしかしてあんた、あんたも、あれ、使えるの？」

え、思わず声が洩れた。

あれ。使える。恐らくそういうことだ。ずっと自分は特別だと思っていた。この能力のおかげでケースケは負けなし。無敵だった。けれど、ずるをしているみたいで、ユウ以外には誰にも言わず、ずっと秘密にしてきた能力だった。それが、さっき会ったばかりのア

イにあっさり見抜かれた。その能力を使おうとしていたことを、いとも容易く。なぜか頭に血が上る。顔が熱くなる。ぼーっとし始めた。

そしてケースケは呟く。

「ごめん、俺の負けでいいよ」

何に対して謝ったのか分からない。驚いて振り返るエテボースを、さっさとボールに戻して、びっくりして声をかけてくるユウも無視する。

「行こう、ユウ」

ライモンシティの方に歩き出す。これは、逃げだ。分かっている。でも、逃げなきゃ。逃げなきゃ、なにか、なにかが崩れてしまうような気がする。なにかが終わってしまふような気がする。

アイの横を素通り。

「ちよつと待って！」

しようとしたところで腕を掴まれた。

「待ってよ、なんで逃げるの」

「俺の負けでいいって言っただろ？ お前の勝ち。それで何の文句があるんだよ！」

頭に上った血は、ケースケから冷静な思考を欠いていた。なんで自分が怒鳴ったのか分からない。でもそうしなきゃいけない気がした。初めての敗戦をごまかしたかったのかもしれない。そうでもない、きつと泣き出してしまふのだ。

アイは黙ってケースケを見ていた。ほとんど目線は変わらないけれど、ケースケよりもほんのちよつとだけ背が高いようだ。そんな目で見ないでくれ。ケースケの内心は恐らく顔に出ているだろう。自分でも分かった。顔がちよつとずつゆがんでしまふのが。

「その子どもたち」

そのとき、リゾートデザートの方から声が聞こえた。民家からおばさんが顔を出している。バトルの騒がしさと、二人の言い合いが聞こえたのだろう。三人の視線は民家のおばさんに移った。

「とりあえず、休んでいきなさい」

おばさんはにっこりと笑った。一筋の涙がすつと頬を伝った。慌ててぬぐって、見られていないか確認する。アイもユウもお婆さんの方を向いていて、気づいていなかったようだ。

ケースケの頭からようやく血が下がっていった。

「なるほどね。それがあんたの能力なんだ」

ケースケが説明し終えたところでアイは驚く様子もなく、納得したようにそう言った。

おばさんは気を利かして別の部屋にいる。この部屋にいるのは三人だけで、話しながら休むには申し分のない環境だ。

「私の能力について説明するよ」

アイは缶のサイコソーダを一口含んで、テーブルに置き、話し始めようとしたりとここでむせた。

「お前、炭酸苦手だろ」

「う、うるさい」

むせながら返す言葉には説得力がない。

「あと、お前じゃなくて、そろそろアイって呼んでよ。違和感あるし。……けほつ、私もケースケとユウって、呼ぶから」

「おう。じゃあ、アイ、能力の説明よろしく」

ない胸を叩いて気道を戻して、アイは話し始める。

「私の能力は、バトルの時だけ相手の心が読めるの。読めるっていうか、心の声が聞こえてくる。人間もそうだし、ポケモンも。だから相手の次の行動が読めるし、後攻に回れば、避けてカウンターの繰り返しができた。でも、やっぱりケースケと同じように、さっきのバトルでは発動しなかった。なんでだと思っ？」

ふむ、ケースケもサイコソーダを口に含む。

「げほつ、えほつ」

「あんだ、炭酸苦手なのね」

むせた。隣ではユウもむせているから、サイコソーダはよっぱどサイコな炭酸なのだろうと思う。ちゃんと治まってからケースケは口を開いた。

「やっぱりさ、能力者同士のバトルだと、能力は発動しないんじゃないか。なんか、こう、相殺するみたいな感じで」

「たぶん、そう。私とケースケがバトルするときは、能力を使わずに戦わなきゃいけないってわけね。ちょっと驚いたけど、考えてみたら納得」

そこでユウが口をはさんだ。

「ねえ、さすがに長居しすぎじゃないかな？ サイコソーダが出てきたあたりから、そろそろ帰って意味じゃないかと思ってたんだけど……」

確かに。考えてみるとサイコソーダはもつとゆっくりしていきなさい、という意味ではなくさっさと帰れという意味が込められているのかもしれない。なにしろサイコソーダはサイコなのだから、飲めばむせる。休ませてもらって文句を言うのもどうかと思うが、飲み物にサイコソーダを選ぶあたりは、いかななものかと思う。

「とりあえず、出るか……。いや、その前に、アイはこれからどこ行こうとしてた？」

「別に予定はなかったけど。ケースケは、スクールの代表だから、会場に向かうところ？ それならライモンシティよね。一緒に行ってもいい？」

「ん、まあ、いいよ」

ちらりとユウの方を見るとすました童顔がそこにある。問題はなさそうだ。

「おばさん、ごちそうさまでしたー！」

隣の部屋にまで聞こえるくらいの声で叫ぶと、ケースケたちは民家を後にしてライモンシティに向かうことにする。

旅をする子どもたち【3】

3

ライモンシティに入ってまずは、観覧車の大きさに思わず目が釘付けになった。ヒウンシティとは、また違った特徴の都会である。ここに来て、自分は隣町のライモンシティにすら来たことがなかったのかと思う。

もっと小さかった頃、夏休みは何をしていたんだっけ。

ケースケは考えてみるのだが、思い出そうとするとなかなか思い出せないのが人間の記憶というものである。本当に全然出てこない。ようやく思い出したのが、公園のような場所にある大きな木。そういえば、昨日の居眠りしたときに見た夢もこんな感じだったか。どうしてだか離れない記憶。もう少しで、何かとても大切なことを思い出せそうだった。

何か。

そこで現実に戻される。ガラスを割る破砕音が、南中時刻を迎えたライモンシティに響いた。街は一瞬の沈黙の後、狂気の渦に飲み込まれる。

「なに今の!」

アイが叫んで音のする方に向く。それにつられてケースケも視線を向けると、ポケモンセンターのガラス扉が粉々になっているのが見えた。

あ……。自然とケースケの口からは声が洩れる。

「ポケモンセンター連続襲撃事件だ……」

「何それ?」

どうやらアイはテレビを見ていないらしい。疑問を口にしたアイにはユウが答えた。

「最近、各地のポケモンセンターが襲撃されてるんだ。たまたま僕

「私たちは、現場に居合わせてしまった、というわけさ」

「ジューサーさんとか、周辺施設の警備員が騒然とした街に出てきて、避難を促している。ポケモンセンターからは何かの割れる甲高い音だとか、壁を叩くようなくぐもった音が聞こえてくる。かなりの音量だ。」

「君たち、今すぐ逃げるんだ！ 避難場所はジムだ。場所は分かるね？」

警備員が話しかけてくる。その人は、周りの警備員よりも綺麗な格好をしていた。スーツを着ていて、正式なガードマンのようだ。恐らくミュージカルホールの警備員なのだろう。

「警備員さん、犯人の武器は？」

「は、武器？ 何を言っているんだ、早く逃げて！」

まともな答えは期待していなかった。どうせこの人も犯人についての情報なんて知らないだろう。

ケースケは妙に落ち着いていた。ミュージカルのジャズの代わりに響く悲鳴。人々がポケモンセンターを爆心地のように扱い、息を切らして観覧車の下に駆けていく。そんな光景がどこか滑稽にすら見えた。

「アイ、行こう。俺たちなら止められる」

「当たり前でしょ。早くしなきゃ。敵が、逃げる前に」

自分たちなら勝てる気がした。やれる気がした。警備員の制止を振り切って走り出す。後ろからはユウがついてくる。隣にはアイ。なぜだか、ずっと前からそうやって走ってきたような気がした。

そこには惨状が広がっている。割れるものは全て破片になって、家具の類も全部ぼこぼこ。プラスマ団とロケット団を混ぜたような格好の制服を着て、何人かが歩き回っている。傍らにいたのはレパルダスだ。

左目から色がなくなった。それは向けられる敵意に反応した色彩変化。

姿勢を低くしたレパルダスが、破片を蹴りながらエテボースに攻撃をしかけてくる。つじぎり。強力な横一闪の一撃が、白黒の世界でエテボースを切り裂き、再起不能にする。なぜだか近くにいるアイの姿は見えない。やはり干渉はできないらしい。

色が戻った。

「垂直跳び」

ケースケがエテボースに短く指示を出すと、直後に向かってきたレパルダスの攻撃を避けて、エテボースが頭上の攻撃位置を確保する。そこから身体を捻り、ダブルアタック。再起不能になったのはレパルダスの方だ。

持ち主のトレーナーがレパルダスを戻し、近くにいた別のレパルダスにさらなる指示を下す。連鎖するように数人のトレーナーが攻撃の指示を出してきた。さすがに数が多い。でも、ケースケには能力がある。

襲ってくる三匹のレパルダス。色のない目を通して、三匹の攻撃範囲を正確に読みとる。エテボースが通り抜けられるほどの隙間。

そのタイミング。ケースケは完全に把握して、世界に再び色を戻す。「真ん中のレパルダスの上だ」

その通りに動くと、エテボースは三匹の攻撃をかいくぐって背後に抜ける。それから繰り出すダブルアタック。一匹撃破。反撃にくる二匹のレパルダスも同じように能力で見透す。回避して、カウンター。残るは、一匹。

「ケースケ、伏せて！」

ユウの叫び声だ。急いで伏せると、頭上をレパルダスが跳びすぎteいった。バトルに集中しすぎていて、自分の身を守ることまで気が回らなかつた。普段はこんな戦い方をしないのだから、さすがに難しい。

「今のは僕が相手するから、大丈夫」

そう言ったユウの傍らにはチラチーノがいる。

「サンキュー。このまま全部倒すぞ！」

掛け声を上げている時でも敵は容赦しない。エテボースに攻撃を仕掛けるレパルダス。よそ見をしていたせいで、攻撃がかかる。今度は正確に攻撃の軌道を補足。回避してからのダブルアタックで、最後のレパルダスを片付けた。

アイもほとんど同時に戦闘を終えている。残りはユウが対峙する一匹だけ。それも今、チラチーノが再起不能に追いやった。

「犯人たちを捕まえる。手持ちのポケモンを出してくれ」

ケースケが協力を促そうとしたとき、破片を踏み鳴らしながら警備員たちが入ってくる。まったく、今まで何をしていたんだ。仕事くらいちゃんとしてほしい。そんなことを考えるケースケを尻目に、戦意を喪失した犯人たちを手際よくお縄にかけていく。どうやら警備員だと思っていたのは、ジューサーたちだったようだ。それならなおさら、警備員は何をやっているのか……。

「よくやってくれたわね、君たち。あとは私たちに任せて、ジムに逃げて。ジムが避難場所になってるから。ジムの場所は」

いや、とケースケが遮る。

「俺たちが犯人を捕まえたんです。話を聞く権利くらいありますよね？」

ジューサーは言葉に詰まっている。

「ねえ、それよりも、ジョーイさんの安全確認が先じゃない？」

「それなら、ご心配なく。奥の部屋で全員無事だという連絡が入っています」

よかった、アイが呟く。

ジューサーが犯人を全員捕まえ、連れ出そうとするのを、ケースケは遮った。

「ちよつといいですか。少しでいいんで、話をさせてください」

そのジューサーは、三人のおかげで捕まえられたことを考慮してくれたのだろう。不本意そうではあったが、頷いてくれた。

「まずはグループの名前を教えてくださいよ」

捕まっている犯人たちの中から、弱そうな男を一人選んでケースケは話しかけた。

「おい、自己紹介の時間じゃねえんだぞ」

「ごもつともであった。」

「じゃ、じゃあ、目的は何だったんだよ」

「なんでお前みたいなガキに教えなきゃいけないんだ。ああ？」

完全になめられていた。

「ケースケ、代わって」

アイが代わりに相手をする。まずはケースケをどかすと、近くでヨガのポーズをとっていたコジヨンドを呼び寄せる。それから指示を出す。はっけい。

コジヨンドの掌打が男の腹部にめりこんだ。男は勢いよく空気をはき出してむせる。

「さあ、目的を言って」

「くつ、言うかよ」

二発目のはっけい。男は膝を折った。

「言え」

「……はっ、かつ、くそつ、俺たちは、プラズマ団の、残党だ。ポケモンの、解放が、目的。だから、ポケモンセンターを襲ってんだよ！」

男は自棄になったように吐き捨てた。

ケースケは腕を組んで、足下に散らばるガラスの破片を軽く踏んだ。なんで今になってプラズマ団なのだろう。組織はほぼ崩壊して、残っているのなんて本当に下っ端くらいなものだと聞いたことがある。ゲーチスを含めた七賢人が離散した後、組織を率いていく絶対的存在が居なくなってしまうたからだ。考えてみるほどにその事実

は意外だった。

「そろそろいいわね？」

ジューサーが頃合いを見て、問いかけてくるのにケースたちは同時に頷いた。

犯人とジューサーがポケモンセンターから出て行くと、残ったのは三人だけだった。ジョーイたちは奥の部屋から出てこない。もしかしたら裏口や非常口の類があつて、そこから抜け出したのかもしれない。惨禍を見渡して、しばらくはポケモンの回復もできないだろうと思う。そうなってくると、大会の本戦が始まるまで修行をしようと思っていたケースには、あまりいい状況じゃない。

「ケースケ。これからどうするの？」

ユウも同じようなことを考えていたのだろう。

「俺も今、考えてたところ。ポケセンが使えないんじゃ、ライモンシテイは拠点にできないしなあ」

「何しようとしてるの？」

コジョンドをボールに戻しつつ、アイが問いかけてくる。

「大会は来週だからさ、それまでこの辺で修行しようと思ってたんだよね。でも、これじゃあ、どうしよいいもない」

それだつたらさ、とアイが提案する。

「いったんホドモエシテイに行く、っていうのはどう？」

「……おいおい、お前、テレビ見てないのかよ。ホドモエも襲撃受けたばかりなんだから、使えるわけないだろ」

「そうなんだ。じゃあ、ヒウンシテイ方面に戻って、ジムリーダーと戦うのはどう？」

まあ、それしかない。さすがに回復なしでホドモエ方面に行き、使えるかどうか分からないフキヨセのポケモンセンターに期待して旅をするのよりは、よっぽど安全な選択だ。犯人を何人が捕まえたのだから、ヒウンシテイはすぐに襲われることもないだろう。

「じゃあ、そうしよう。って、アイも来るのかよ」

「だめなの？ 私も修行したいし。だめって言うなら、いいけど」

「いや、だめじゃないけどさ……。ユウは？ いいよな？」

自分に話を振られると思っていなかったユウは、急に名前を言われて口ごもった。咳払いをして喉に空気を通すと、答えて同意を示した。

これで本格的にアイも旅の一行に加わったというわけだ。

「改めて、よろしくね」

珍しくアイは微笑んだ。なぜだかその笑顔を懐かしいと思う。新鮮という感情は起こらずに、ただひたすら懐かしくて、欠けたピースが戻ってきたような、妙な安心感ばかりがケースケの感情を満たしていた。なぜだろう。考えてみても分からない。

ユウがよろしく、と返して、ケースケも慌ててよろしくと言う。手を伸ばしてくるから、それに応えて手を握ると、女の子の柔らかい感触と温度が伝わる。それからまた笑った。ケースケも微笑み返す。その笑みすら懐かしい。なぜだろうか。でも、どうでもいいではないか。

喜びもその笑みも、今ここにあるのだから。

旅をする子どもたち【4】

4

一度ヒウンシティに戻ったのだが、スカイアローブリッジを見つけたアイは、どうせならシッポウシティにまで行ってみようと言っ
てきかなかった。スカイアローブリッジの何がアイを惹きつけたの
かは分からないが、アイにとっては心揺さぶる何かがあったらしい。
そして、これからスカイアローブリッジを越えてしまえば、すぐ
に日も暮れるだろうという時間帯だった。なにしろスカイアローブ
リッジは恐ろしく長い。下り坂があれば上り坂もある。自転車を使
ってもしんどい道のりは、徒歩で超えるならなおさらしんどい。ケ
ースケはユウのうんざりしたような呟きに同意を示したが、アイの
方は全く弱音を吐かなかった。

こんなときに空を飛べるポケモンが居たら……そんなことを思っ
て、ヒウンシティの知り合いから借りていくことを提案しても、ア
イの方は歩いてみたくて仕方がなかったらしい。不承不承、長い道
のりを踏破して、ヤグルマの森に差し掛かった時は、既にして夕暮
れ時だった。

「どうしてこんなに時間がかかったんだ……」

ユウの呟きも、もつともだ。スカイアローブリッジを目の前にし
て、歩みがかどるはずもない。いつもよりゆっくり歩いていた実
感があった。ケースケはため息を洩らす。

「……今日はシッポウシティまでだな。ジムは明日にしよう。さす
がに疲れた」

「え？ 今日中に挑戦するんじゃないの？」

それを聞いたユウがアイに泣きそうな顔を向けた。

「行くとしても、僕はポケセンで休んでるけど」

「はあ、男のくせに」

「あー男女差別だ」

「違う。体力は平等じゃないんだから差別じゃない」

言われてみればそんな気もする。ケースケは喋る気も起きないくらい疲れていた。

喋りながら歩いていると、そこら中、ぼこぼことうずたかい落ち葉の下で土が盛り上がっている。トレーナーだ。ケースケはもちろん無視するつもりだったが、アイの方は一日にこれだけバトルをしてもまだ元気らしい。落ち葉を蹴り払って掘り起こす。それから、しらみつぶしにトレーナーを完膚無きまでに叩きのめしてから、先に行く二人に追いついてくる。その無双ぶりがあつという間に森中に広まって、ケースケの行く先にはディグダのように動き回るよく分からないトレーナーが続出した。普通に出て歩けばいいものを……。

そうしてやっとヤグルマの森を抜ける。

夕暮れ時についたシッポウシティでまずはポケモンセンターに行き、手持ちを全快にする。夕食を食べようと、三人でカフェソーコに入った。

時間もちょうど夕飯時だったからか、店は賑わっていた。カフェと言うよりはバーのようで、一段下がったステージには男の子のパフォーマーが居て、逆立ちをして客から拍手を浴びていた。

「あ、すごい。跳んだ」

思わずユウが感想を言う。確かに片手で逆立ちして、その腕をバネにして跳ぶのはすごい。しかもその勢いを利用して空中で回転、両足で見事に着地した。拍手が響く。

その男の子の茶髪は逆立ちしているから重力で下がっているものだと思ったが、直立してもそのつんつんした髪はおりてこなかった。寝癖なのかワックスなのか知らないが、短髪であるから立ちやすいようだ。場の雰囲気似合わず、服装はタンクトップに短パン。虫取り少年のような格好をしている。

拍手が止んだの見計らって、男の子がポケモンを出す。ボールが

放った光はカポエラーで、見た目に反して虫取り少年ではないらしい。

一人と一匹はすつと回転して、逆立ちになった。そこから頭を床につけて、ブレイクダンス。カポエラーと男の子の息はすっかり合っている。またも拍手が起きた。

男の子が立ち上がると、近くにあつた鞆を引き寄せて、中身を探り始めた。その間にもカポエラーはブレイクダンスを続ける。男の子は鞆から木の実を取り出して、投げると、カポエラは跳躍し、口を使って空中で木の実をキャッチ。一度勢いがゆるんだ回転は、ステージに降りるとまたすぐに勢いを取り戻す。男の子がもう一度、木の実を投げた。一つ、二つ、三つ。カポエラーは足を使って、お手玉のように回し始める。

「何あれっ、ぐしゃってならないの？ どうして？ す、すごっ」
「どうやらユウは男の子のパフォーマンスを気に入ったようだ。アイも目を丸くして見入っている。」

足で行われるお手玉は続いている。カポエラーが一際大きく身体を捻った。それから三つのうち一つの木の実を高く飛ばすと、今度は男の子がその木の実を口でキャッチした。

しかも、食べる。

「うっわ、足で触ったやつ食べた」

「いや、そこじゃないだろ！ 人が、木の実を食べてるって、えー」
それから、二個目、三個目と、続けて木の実を食べていく。三つも食べたからお腹を壊したりしないのだろうか。ただでさえ木の実がポケモンの食べ物で、極端な味をしているのに。

そうして締めくくりに拍手喝采。男の子は客に声をかけられて照れている。

感心して見ていると、ユウとアイが男の子に近寄っていった。すごいね、すごい、と声をかけている。ケースもそれに続く。

近づいてみると男の子は背が高かった。早速自己紹介を始めたユウが十四歳だと紹介すると、男の子も同じ年だという。これで同じ

年かよ、と思いたくなくなるくらい背が高い。服装は若干子どもっぽいような気もするが。

「俺の名前はイオだ。イオって呼んでくれ」

そのまんまじゃん。

「普段からここに来てるの？」

アイの問いに対して、イオは首を振った。

「たまたま今日寄っただけさ。空っぽのステージがあったら、特技を披露したくなるもんだろ？」

「そうだよ、それすごく分かる！」

ケースケには全く分からないのだが、アイとイオにとってはそういうものらしい。私も何かやろうかな、なんて珍しく上機嫌でアイはもじもじしている。まるで告白前の女の子だ。そんなことを考えたら不意にアカリのことを思い出した。生まれてこの方一度だって告白をされたことのないケースケに、堂々と好きですと言いつつ少女。夢があるんです、と言った少女。旅に出ます、と言った少女。アカリの笑顔が脳裏に浮かんでは消えていく。頬が赤くなってきた頃には、もう周りの話し声なんて聞こえなくなっていた。今、アカリはどうしているのだろう。

「ケースケ、どうしたの？　もしかして、イオに惚れちゃった!？」

「誰が惚れるか　　!」

ケースケは全力で否定した。

すっかり日も落ちて、夜の闇が囁き始めた。

カウンター席に四人並んで腰掛けている。食べているのは汁そば。ここは本当に喫茶店なのだろうか、疑問に思い始めて解決するより早く、ウェイトレスがサイコソーダをくれた。ますます分からなくなつた。

「へえ、じゃあイオも旅してるんだ？」

「おうよ。俺の旅は、全国の木の実を食い荒らす旅だ！」

いや、荒らしちゃだめだろう。イオとユウはすっかり意気投合したようで、まるで親友が再会したかのように喜色満面で話している。その間にアイが入ったりして、なぜだかケースはその様子を見て聞いて静かにしている他なかった。

「楽しそうだね」

盛り上がる二人を邪魔しないように、アイが小声で話しかけてきた。気を遣ってくれているのだろうか。

「ユウなんて、さっきまで泣きそうな顔で疲れた疲れた言っていたのになあ」

ちらりとユウを見る。聞いていない。それくらい会話に熱中している。

「まるで兄弟みたい」

「兄弟？ 親友じゃなくて？」

「うん、兄弟。外見もそうだし、ユウが子どもみたいに懐いてるから」

そう言われてみれば、そんな気がしなくてもない。兄弟。確かに兄弟みたいだ。

兄弟かあ。ケースは何となく呟いてみた。一人っ子の自分の耳にはあまり馴染まない言葉だった。

「ねえ、あの二人が兄弟だったら、私たちは何に見えるかな？」

「え？ 私たちって？」

「私とケースに決まってるでしょ」

何を藪から棒に。そうやって聞かれても、思い出すのはアカリのことだった。なんでこんなに意識してしまうのだろうか。アイだって外見は悪くない。性格をちょっと直せば、世間的評価はアカリを上回るだろう。それなのに、それなのに。

はっ、とする。なんて答えればいいだろうか。

「もしかして、酔ってんの？」

「酔ってるわけないでしょ！ ばーか」

アイはそつぽを向いた。今の反応ってもしかして
？
「なんてね。冗談だよ」

ケースケは面喰らった。淡い期待はあっさり打ち砕かれる。人生最初のモテ期が来たのかと思っではらはらした。それは台風が来る衝撃なんかよりもずっとずっと大変なことで、不安だし怖かった。自分は平凡な一般人でいい。

ウェイトレスが二本目のサイコソーダをくれた。水曜日はサービステーで、サイコソーダが貰える日らしい。嬉しいのだが、その一方でリゾートデザートの民家を思い出す。飲み物を出されるのは早く出て行ってほしいという、気持ちの表れではないかと話したばかりではないか。

「どうする。そろそろポケセン戻る？」

「そうだね。そろそろ、戻ろっか。ユウはどうする？ 後から来る？」

アイがユウに向かって言うと、イオとの会話を中断させて、こっちに体を向けてくる。

「ん、僕もそろそろ戻ろっかな。イオもポケセン？」

「いんや。俺はここに泊めてもらうことになってんだ。ユウたちも泊めてもらったらどうだ？」

それにはウェイトレスが答える。

「場所はあるんですけど、寢床が用意できないんですよ。あと一人分くらいならご用意できますけど」

「あ、じゃあ、僕が泊まってもいいですか？」

ユウは本当にイオのことが気に入ったらしい。イオもおおらかに笑っている。その様子は確かに兄弟のようだった。

ケースケとアイの二人は、仕方なく二人でポケセンに戻ることになった。

「なんか、ごめん」

「なに？」

アイに聞かれて、なんで謝ったのだろうと思った。言葉を探す。

「二人きりになっちゃったし」

ぶっ、とアイが吹き出した。

「そんなこと気にしてるの？」

「だって、今日会ったばかりだしさ」

「そういえば、そうなんだよね。なんかケースとは、初めて会った気がしない。ちょっと不思議」

「あ、それ俺も思ってた。どつかで会ったことあったっけ？」

あるわけがないと分かっているも聞かすにはいられない。アイは少しも考えずに、あるわけないでしょ、と返して笑った。

ポケモンセンターの宿泊施設を借りて、まず真っ先にシャワーを済ませ、それから今、二人はそれぞれのベッドに寝そべっている。

二人用を借りたから、ベッドも二段だ。上がアイで、下がケース。部屋は簡素な作りで、家具の類いはほとんどなく、ひたすら機能的だった。

「ねえ、自己紹介でもしない？ 名前とかそういう簡単なのじゃないか、もつと突っ込んだ話」

「アイが話してくれるなら」

うーん、と唸って考え始める。提案したくせに自分が話すことは決めていなかったらしい。少し経ってからアイは話し始めた。

「私は一人っ子なんだよね。出身はカントー地方らしいけど、親の仕事の都合で転々としてきたから、カントーに居た頃のこととは覚えてない。こっちに来て結構長いんだけど、やっぱり一年以上スクールに居ることがないから、友達もいない。おかげさまで上辺だけの付き合いには慣れたけどね」

布団のずれる音が上から聞こえた。まだ寝るつもりじゃなかったケースは、枕を横にやって両手を枕代わりに敷いている。友達がない。それはケースも同じようなものだ。ユウ以外の人とは、ほ

とんど話さない。だから同じクラスのアカリですら覚えていない始末。でも、とケースは思う。

「なんで、こんなこと話してくれたの？」

「私から言い出したんだから、言わなきゃ、不公平っていうか」

「言わなきゃばれないのに。俺だってまだ何も話してないし」

「こつこつこの話すとやっぱり、うざいの？」

「そつというわけじゃ、ないけど」

そつ言ってしまうと気まずい沈黙が部屋に満ちた。

まだ会ったばかりなのに。初めて会った気がしない、とアイは言った。ケースも同じくそつ思っているのだが、いくらなんでも、こんな突っ込んだ話をいきなり話すのは……と考えてみると、それは時間の問題なのかと思う。時間が経てば話せるようになるのか？ きつと違う。親しくしようと思うのなら、どうせいつかは話すことだろう。だったら親しくしようと思った時点で、話すのと何も変わらないではないか。むしろ、早く話してしまった方が親しくなれる。だったら、アイは親しくしたいと思っているのだろうか。それはあるいは、夜の囁きが惑わせた気まぐれなのかもしれない。

「じゃあ俺のこと話すよ。俺もユウも同じく一人っ子。生まれからずつとヒウンシテイにいる。まあ、実を言うと俺も友達がいな

「
そこまで言いかけて何か脳裏を過ぎった。
友達がいない？」

ぱつと浮かび上がる大きな木の映像。木陰に入った子どもたち。楽しそうな顔には、その場

の遊び相手ではなくて、毎日一緒にいるような親しさを感じる。この思い出の中の子どもたちは、友達じゃないのか。そもそも、ここはどこだ。

「どつしたの？」

アイが聞いてくる。ぼんやり、大丈夫と返す。何で思い出せないんだろう。記憶障害なのか。突拍子もないことを考え始める前に、

色んな記憶を掘り起こす。友達と遠出して川に入って遊んだこととか、公園で鬼ごっことか、友達の家に行って絵を描いたり、ゲームをしたり。ああ、一番多いのはゲームかもしれない。そういえば、ゲームばかりしていた。そうだ、友達が全く居ないわけじゃない。自分が意識していないだけで、少ないけれど友達はある。

「そっか、いたんだ」

「え？」

「いや、なんでもない」

再びの沈黙。ごめん、と言ってからケースケはまた口を開く。

「俺には語るようなことなんてなかった。アイの話と釣り合わないけど、ごめん」

「いいよ。私が話したくて話ただけなんだし」

話が続かない。時計を確認してみると、そろそろ普段寝ている時間になる。今日は疲れていることだし、寝てもいいような気がする。くる。

「寝よっか」

アイが言った。ケースケは返事をして、枕の位置を戻して、電気を消した。明日はジムに挑戦する。修行のついでにバッチを手に入れたりとか。あとはアイとユウ、居るならばイオが居てもいい。四人で楽しく旅しよう。

ベッドの上から布団のずれる音が聞こえて、やがて静かになった。ケースケは目を閉じる。

「おやすみ」

旅をする子どもたち【5】

5

「ケースさんですね？ 封筒を預かっております」

二人がチェックアウトをしようとして部屋の番号を告げたとき、ジョーイさんはそう言って白い無地の細い封筒を渡してきた。表にも裏にも差出人の名前はなく、心当たりもないものだから、これほど怪しいものはない。とりあえずチェックアウトを済ませて、ロビーのソファに二人で腰を下ろす。

「ユウかな？」

アイが疑問に思うのも無理はない。

「違うと思う。ユウだったら普通にライブキャスターで話しかければいいんだし」

確かに。と返事がくる。

丁寧に封をされた細い封筒を開く。中から出てきたのは三つ折りの用紙。線が何本も引かれていて、花柄が縁取る。書いてある内容を見るまでもなく手紙だ。ああそうか、アカリだ。そう思ったケースの期待を裏切って、文面には堅い語り口で男の字が踊る。

「なんだこれ」

意図せずに洩れた言葉。その声はアイの耳にもケース自身も耳にも入らない。二人は手紙に書かれた文章を読み取るのに必死だったからだ。

読み進めていくと、どうやら全く知らない人物であるらしい。それもただの手紙じゃない。お誘いのお手紙だ。試し岩で待っているので来てほしいと書いてある。

「できれば朝の十時までに……って、あと五分もないじゃない」

時計を確認していみると確かに十時の五分前だった。チェックアウトが十時までだから、恐らくそれを見越して書いてきた手紙だ。

寄り道せずにくる名前は、Mと書いてあるのだから尚更あやしい。

「なんか、怪しいな」

「怪しすぎるよ。Mって人の名前？ 何これ、ふざけてる」

「ああ、ふざけたマゾヒストだ」

「って言ったら叩かれた。冗談だったのに。」

「とにかく、行くの？ 行かないの？ 私はケースケに任せるけど」

「普通に考えるならば、これは悪戯か、そうでなければ本格的に何かのお誘いだ。でも誘いだとして、なぜ試し岩に呼び出すのだろうか。この周辺なら、カフェソーコとか、それこそポケモンセンターとか、挙げればきりが無いほど場所はある。」

「変なことに巻き込まれる覚えはないしな……」

「何言ってるの、あるでしょ」

「え？ 疑問を口にしてみて、やっと思い出す。」

「あ、そっか。そういえば昨日、変なグループやつつけた」

「あるとしたら、それ。毘かもよ？ どうするの？」

「ケースケはソファに深く座り込んで、背もたれに体重を預けた。」

天井の目に痛くない照明を見つめて考え始める。毘だったら、どうするというのが。こっちは能力者が二人。負けるようなことはない。それよりもむしろ、犯行グループを一網打尽にするチャンスかもしれないではないか。乗りかかった船なら、岸まで乗るのも悪くはない。

「行こう」

「え、行くの？」

「おう。俺たち二人なら、たとえ毘だったとしても負けない。そうだろう？」

「ケースケは仰いだ状態から元に戻る。」

「そう……そうだね、大丈夫。わかった、行こう」

「よっし、じゃあ時間も無いし、さっさと出発するか！」

「勢いよく立ち上がったケースケに反して、アイの方は動きが鈍い。」

あまり気乗りはしないようだ。明らかに怪しいと分かっているのに、行くのは確かに不安だろう。

「大丈夫か？」

「え、うん、もちろん。あつ、ユウたちどうしょ？」

「ジョーイさんに伝言を頼めばいい。試し岩の方に行ってるって」
「そうだね、とアイは返事をした。ケースケは歩いてきたジョーイさん呼び止めて、伝言を頼む。それから二人はポケモンセンターを後にする。向かう先は、試し岩だ。」

試し岩の陰から男が出てきた。黒のスキニーデニムを履いて、白のブイネックシャツを着る。白黒で統一されていながら涼しげなスタイルを巻いている。さらにグレーのハットをかぶっていて、細身の長身。まるでオフ中のホストみたいな格好だった。雑誌の表紙を飾っていてもおかしくはない。まだ二十代前半くらいの若そうな外見だ。

ケースケは思わず言葉に窮した。

「やあ、もしかして、君がケースケくんかな？ まさか子どもだとは思わなかったよ。ぼくは、Mだ」

ハットに片手を軽く添えて、なぜかポーズを決めながら爽やかに話してくる。

「あなたが、マゾヒストですか」

「違う！ マゾヒストのMじゃなくて、Nの次だからMだ！」

ケースケの言葉に、男はすかさず反発した。でもちよっと待って、
「Nの次って、MじゃなくてOじゃない？」

あ、言ってしまった。

「なっ、え、そんなはずは……」

と言いつつアルファベットの歌を歌い始める。L、M、N。あ。

「なんてことだ……」

「気づけよ」

整った顔をゆがめて本気で落ち込んでいる。ボケでも何でもなく、普通に間違っていたらしい。

「これではN様に合わせる顔がない」

「N様？ それってまさか、プラズマ団の？」

ああ、と男は頷いた。

「ぼくはN様の後釜だ。解散したプラズマ団の意思を継ぐ組織の、象徴的存在と言っていていいだろう」

「それ自分で言うのか」

「象徴は自信家でなくてはいけないからね。とりあえず、Mはだめだ。三元院と呼んでくれ」

アイもケースケも、出会い頭とは別の意味で言葉に窮した。だめな大人の典型とでも言うべきだろうか、とりあえずこの人にぴったりの言葉は、だめそうな感じを当てはめれば大体合うだろう。

「そういうわけで、三元院だ。よろしく」

「三元院とは何ですか」

「ふむ。人の名前に文句があるのかい？ 何って、かつこいいからに決まってるじゃないか。象徴的になつこよさだ」

まったく意味が分からなかった。アイなんかはもはや声を抑えて笑っている。ケースケの後ろに隠れていなければ、三元院の面倒なつつこみが入るところだったろう。

「ところで、何の用ですか、三元院」

「おい、敬意を表せ。せめて三元院さんと呼んでくれ」

いやだ、また話がややこしくなりそうなので、その言葉は呑み込んだ。

「そうだ、用というのは、他でもない。ぼくたちの計画を破綻させた君たちの実力を買ってだな、ぜひとも君たちを雇いたいというわけさ。これはビジネスだ。ちゃんと相応のお金も払うよ」

いやまさか。

本当にお誘いのお手紙だったのだ。罫に嵌められてどうかさせるとか、そういうのではなく、引き抜きの方だった。

「いやだ」

今度はちゃんと声に出して言った。こんなものアイと話し合うまでもなかった。

「ほお。嫌なのか。嫌かーそっかー。また断られちゃったよ。それもまた子どもだ」

そう言っつて落ち込み始めた。そんな反応をされると思っつてなかったケースケは申し訳なくなった。

「まあ、そりゃ、そうだよなあ。本当にいいんだね？ 二度は誘わないよ？」

ケースケは振り返つてアイと目を合わせる。神妙な面持ちで頷くと、アイはウエストポーチに手をかけた。

「何度誘われても、いやだ！」

「残念だ。じゃあ、指、鳴らすよ？ ほら、これでおしまいだ」

ハットに手をかけたポーズで、三元院はパチンと指を鳴らした。

直後に周囲ではじけるボールの音。そこら中から光が放たれた。

「どうしよう、ケースケ。かなり多いよ！」

言われなくても分かっている。ケースケは急いでボールを取り出して、エテボースを出す。アイも一足先にコジヨンドを出していた。

見回すと、敵は多いなんてもんじゃない。試し岩の周辺を囲うほどの人とポケモン。統一されたポケモンはレパルダスだ。ざっと数えただけで十人と十匹ほどはいる。ケースケとアイは背中合わせになつて臨戦態勢に入る。

「悪いね。君たちのポケモンだけでも回収させてもらおうよ。かかれ！」

「はい、マゾヒスト様！」

「黙れええええええ！」

仲間内からもずつとマゾヒストのMだと思われていたらしい。これにはさすがのケースケも笑ってしまった。だが、笑っていられる

状況ではない。襲いかかる敵の手は多すぎて、左目が映した白黒の世界で見ても、対処できるような数ではなかった。

「無理だ……」

アイの方からも絶望的な呟きが洩れる。ダメージは避けられないが、極力被害の少ないところを狙って、ケースケはエテボースに指示を出した。数匹の攻撃を回避、一匹の爪をかすらせてしまったが、そのまま狙いの一匹にダブルアタックを叩き込む。レパルダスが地面を転がった。

再び色をなくした世界に入る。エテボースを狙ってくる敵は六匹。そのうちの二匹はもう立ち上がれないだろう。六匹の波状攻撃をかいくぐるには……その思考には答えを出せなかった。かいくぐることはできない。どうやっても大きなダメージは避けられなかった。世界に色が戻り始めて、ケースケは苦虫を噛みつぶした。

「エテボース、逃げてくれ！」

「逃げるのは、違うと思うけどな」

誰だろうと、確認しようとしたところで、エテボースに襲いかかっていたレパルダスが二匹まとめて吹っ飛んだ。攻撃したのはカポエラーだった。その見事なトリプルキックは、悪タイプのレパルダスを一撃で沈めることができる。

「イオ！ それに、ユウまで」

ユウはアイの方のサポートに行っている。これならば形勢逆転もすぐだ。

「くそつ、まだ仲間がいたのか……」

三元院が悔しそうに言った。

敵のレパルダスに反撃の間を与えないように、能力を使って畳みかけようとする。

レパルダスから色が抜けていって、そして、視界にいたイオとカポエラーは消えた。

え？

この左目に映らない。それはつまり、干渉のできない能力者。互

いに打ち消し合う異能を持っているということだ。四匹のレパルダスのうち、二匹が何もない空間に跳びかかる。残った二匹は分かりやすい軌道でエテボースを襲った。世界が戻ると同時に、マイクを通して指示を出し、すぐにイオとカポエラーの方に目を向けた。

「カポエラー、まとめてトリプルキックだ！」

イオが出した指示はそんな力技としか言えないようなものだった。作戦も何も無い。だが、指示を受けたカポエラーは、詳細を言われもしないのに、レパルダスの攻撃を読み切って、トリプルキックを叩き込む。二匹があっさりと地に伏した。

それからエテボースがダブルアタックで一匹を倒し、カポエラーが援護して残りを倒す。周りに居たトレーナーが言葉を失っていた。相性の利があるとはいえ、カポエラーが強すぎる。

イオの能力は何だ？

疑問を解決する暇もなく、戦局は展開していく。倒れたレパルダスを戻した敵は、次々と別のポケモンを出してくる。六匹のワルビルだ。

「芸がねえなあ」

イオはそう言って嘲るように笑った。すぐにカポエラーが動き出す。

指示を出すまでもないらしい。俊敏な動きでワルビルの脇腹に蹴りを入れ、勢いを殺さないまま回転。着地から加速した回転のまま、トリプルキック。

ただ強いだけではない。カポエラーの戦い方は、まるで演舞を見ているかのようで、格好良かった。ケースケは指示を出すのも忘れて魅入っている。むしろ指示なんて出さない方がいい。この演舞の邪魔なんて、とてもできたものじゃない。

最後のワルビルが蹴られてぶっ飛ぶと、周囲のトレーナー達はポケモンをボールに戻して、逃げ始めた。

逃げ道はただ一つだけ。

三元院が何かに気づいてはっと息を呑むのが聞こえた。

そのとき、敵の逃げ道をカポエラーが塞いで、その背後にジューサーが駆けつけた。

「くっそ、ここまでか……」

なだれ込んできたジューサーが手際よく敵を押さえていく。これが一網打尽というところで、三元院を捕まえようとしたジューサーの手が空を切った。

「悪いけど、ぼくは象徴的存在なんですね。捕まるわけにはいかないんだよ」

そう言った次の瞬間には、姿を消している。

「レポートか、象徴的存在、捕まえ損なつたー！」

イオが悔しそうに叫んで座り込んだ。短髪をわしゃわしゃと掻いている。そこに話しかけるジューサー。事がケースケを枠の外に出して進んでいく。おかげで機を逸してしまった。イオは、本当に能力者なのか。そんなたった一言を聞くことができなかった。

旅をする子どもたち【6】

6

「よっしやー！ 余裕勝ち！」

隣のバトル場からイオの雄叫びが聞こえた。少し遅れてケースケとアイも勝利。

三人にユウを加えた四人は、サンヨウシティのジムに来ていた。ジムリーダーが三人居ると聞いて、待つてるのも暇だからという理由で、アイの提案した同時バトルが行われ、三人はあっさりと勝利した。能力者二人と、能力者の可能性がある一人を相手にしたら、苦戦を強いられるのも当然だ。

嵐の到来で口数の少ないジムリーダーたちを尻目に、四人はバツジを手にしてさっさとジムを後にする。

「次は、シッポウジムだろ？ ノーマルタイプだったよな、よゆうー」

スカイアローブリッジを越えるアイのようなテンションで、イオが先導を切ってシッポウシティへの道に行く。その横を楽しそうユウがついていく。ケースケとアイは疲れを顔に見せて後ろをついていく。

「ほら、アイも昨日のテンションみたいに跳ねて踊って歌えよ」

「そんなことした覚えはないんだけど」

「でもテンションは高かっただろ」

まあね、と昨日の快活で嬉々とした少女とは別人のような様子で呟く。

「さすがに、あの二人の間に入る気にはなれないわ……」

見ると二人で楽しそうにスキップしている。横にいるのはカポエラーとチラチーノ。やっぱり跳ねている。なぜあそこまで楽しそうなんだろう。まあ、四人でどんよりしているよりは、幾分ましでは

あつた。

「そうだ、アイには言っておこうと思う」

ケースケが重い足を前に運びながら、そう切り出す。

なに？ 返事があつたのを確認してから小声で話し始めた。

「イオのことなんだけど。もしかしたら、能力者かもしれない」

「えっ、能力者？ 確かに強いけど……どうして？」

驚いて足を止めたアイを歩くよう促して、話を続ける。

「昨日の……なんだっけ、あいつ」

「マゾヒスト」

「そう、そいつらとバトルしてたとき、能力を使ってみたんだ。俺の能力ってほら、目だからさ。ちょうど視界にはイオが入ってたんだけど、能力使ったら消えたんだ」

「それって……」

「そう、ケースケは頷く。

「干渉できなかったんだ。たぶんイオは能力者なんだと思う」

「でも、そんな素振り全く見せてないよ？」

「にしても、あの強さはやばいだろ。なんかあるんだよ」

アイが悩み始め、しばらくして口を開こうとしたところで、先を歩いているイオが振り返った。

「着いたぜ！ おれたち先にポケセン行ってるから！」

そう告げると、なぜか二人と二匹は走ってシッポウシティに消えた。なんだそれ。返事をする間もなかった。

「おもしろいやつだよな」

「能力よりも、あの奇妙な性格の方に興味が湧くわ」

さつきまではしゃいで居たかと思えば、今度はロビーのソファで鼾をかいて寝ていた。イオだけじゃなく、ユウもだ。ユウは鼾なんてかいていなかったが、あの騒音の隣で寝られるのはそれだけで才

能と言つていい。

「もしかしたら、あの陽気さが能力なのかもよ？」

呆れたように言ったアイに、ケースケは「間違いない」と返した。実際、どんな能力を持っているのか判断するには、本人に聞いてみる他ないだろう。

それからポケモンを預けて回復してもらう。二人だけでジムに入るのもなんだか悪い気がしたので、寝ているイオとユウを待つことにする。賑がうるさいのは仕方がない。ケースケとアイはテーブルを挟んで、ソファに座った。

「これじゃあ、今日中にシツポウジムは無理だね」

そう言われて外を見る。確かに日が落ちてきている。視線をイオに映すと、やっぱり起きる気配はない。ケースケは苦笑して、ソファに身を預けた。

二人が目を覚ましたのは完全に日が暮れた後だった。外は真っ暗でポケモンセンターには淡い灯りがともる。子どもだけで夜のポケモンセンターに居るのは、合宿のようで、疲れ気味だったケースケは時間が経つにつれて胸が高鳴るのを感じていた。

四人は今日もカフェソーコに入る。イオが昨日のように様々なパフォーマンスで場を盛り上げ、惜しみない拍手を浴びていた。ユウは誰よりも称賛を送って、拍手も一番大きな音を立てていたと思う。パフォーマンスが一つ終わるたび、イオの方もユウに親指を立ててよこした。

「もう付き合っちゃえばいいのに」と、アイが言ったのは当然冗談だったのだが、ユウは顔を真っ赤にして、「僕にそんな趣味はない！」と声を張り上げていた。ここまで仲が良いのだから、当然イオも旅のメンバーに加わるのだと思っていた。が、夕食を済ませて、夜風を当たるためにカフェソーコを出たイオの言葉は、予想の真逆

をいった。

「明日にはお別れだわ」

へへっ、と笑いながらイオは言った。

え、と一番驚いていたのは当然ユウで、一緒に旅するんじゃないの？ と聞いたのもユウだ。

「明日はヒウンシティに行かなきゃいけないんだ。ダンスグループとの予定が入っててさ」

ダンスグループ、という言葉が出てくると妙に納得できる。

「それなら、僕もついてくよ！」

おいおい……と、これにはさすがのケースケも口を挟んだ。

「さすがに迷惑じゃないか？ それに、ユウが行っちゃったら、アイと二人になっちゃうんだけど」

そっかあ、とユウは残念そうに言う。

「まあ、そういうことで、本当は今日中にシツポウジム行けばよかつただけだな。俺は明日、朝一で出てくから、ジムには行けないわ」

だったら、聞くのは今しかないだろう。今聞かなければ、イオは寝るためにカフェソーコに戻ってしまう。次会えるのはいつか分からないのだし。

「わかった。えっと、それでさ」

ケースケが切り出した。

「イオって、能力者なの？」

イオはきよとんとした顔になった。

「能力者？ なんだそれ」

それはとぼけているのか、それとも本当に能力者という単語に心当たりのないのか。アイがすかさず反応した。

「私とケースケには不思議な能力があるの。イオもバトルの時に発動する不思議な能力があるでしょ？」

早口でまくし立てても、知らないものは知らないらしい。イオは本当に悩みだして、結局、わからん、と一言だけ答えた。

仕方がないから、なぜそう思ったのかを事細かく説明したのだが、それでもやっぱり心当たりはないらしい。

「ほら、ケースケの見間違いつてこともあるだろう？」

確かに、その可能性もなくはない。

「だったら、確認してみようぜ」

イオがそう言って、口の端を持ち上げた。

「バトルしようぜ、ってことか」

ケースケもにやりと笑う。

翌日の早朝、四人は試し岩のある場所に向かった。

「カポエラー、トリプルキックだ！」

先手を打ったイオの指示に、ケースケは身構える。やはり、能力は発動しない。

「やっぱり、発動しない」

「気にすんな！ 最後までバトルしようぜ」

「へへっ、もちろんだ」

もうアイの時のように気負ったりはしなかった。なぜならここには秘密の共有者が、少なくとも三人いる。それにイオも加えれば四人。誰もケースケのことを咎めたりしないのだ。

ケースケがヘッドセットを通して、エテボースに回避の指示を出した。カポエラーの俊敏な動きが、エテボースを捉えようと無秩序に踊る。翻弄されたエテボースは動けなかった。カポエラーが弾かれた駒のように跳んで、空を切り裂くような勢いで蹴りを繰り出す。風切り音を聞いたかと思えば、次の瞬間には、カポエラーの足がエテボースを横から叩いた。鈍い音を伴って、エテボースは宙に飛ばされる。

どうだ！ イオが叫んだ。ケースケはほぞを噛む。調子に乗って

エテボースで立ち向かうのが悪かったかもしれない。二匹目を出すのは、ケースケにとって初めてのことだった。

ケースケの二匹目はライチュウ。

「また珍しいポケモンだな」

イオが言うように、ケースケが持っているポケモンはイツシユ地方で珍しいポケモンばかり。そう言うイオだって、珍しいポケモンを持っているじゃないかと、ケースケは思う。

「カポエラーほど珍しくはないよ」

珍しいだけでなく、イオのカポエラーはかなり強い。これで能力者じゃないなんて、嘘に決まっている。そう思いたいのには、イオは単純に攻撃を指示するだけで、それ以上のことはしていない。純粋に強い。

ライチュウに指示を出した。遠距離から繰り出せる電気技。十万ボルト。

すぐさま空気中の微量な電気を集め、電気袋を放電して一気に増幅。目に見えるほどの電力をカポエラーに放つ。聞くだけで身震いしたくなるような電気音が辺りに響く。小規模な稲妻から枝分けれるように電流が分離していく。

細い電気の糸を、カポエラーは回転しながら避けた。間髪あけずに二撃、三撃、四撃しても当たらない。カポエラーが距離を詰めてくる。

「跳べ！　じしんだ！」

指示を受けてカポエラーは重心を斜めにしながら跳び上がった。回転が増す。ケースケは、やばいと思った。出来ることは何か。カポエラーが跳躍した時点で何もかもが遅い。

だからケースケに出来ることは、カポエラーの着地点を予想して、そこに十万ボルトを放つ指示をするだけだった。十万ボルトとカポエラーが同時に一点で重なる。地面が揺れて、ライチュウの足下を割れた地表が突き上げた。ライチュウが倒れるのに続いて、カポエラーも倒れる。直前に放った十万ボルトが決定打になったらしい。

「やるな」

「イオの方こそ、ここまで強いとは思わなかった」

ケースケが素直に感想を言うと、イオが照れたように笑った。続けて出してくるのはエビワラー。まさかと思つてケースケは疑問を口にする。

「残りの一匹はサワムラーだったりするの？」

「おう、もちろん。三匹とも俺のお気に入りだ」

自分の拘りを貫いているくせに、バトルの実力は相当なもの。恐らくゴーストタイプなど、相性の悪い相手でも、難なく立ち向かつて行けるのだらう。

「でも、俺の三匹目には勝てないよ」

イオの表情が真剣になった。ケースケが出したポケモンは、他の二匹よりも殊更に珍しいポケモン。ぱつと見ただけでは、石がそのまま恐竜の形をして動いていると思つても不思議ではない。灰を浴びたかのような翼を広げ、矢印状の尻尾を振り上げ、天を仰ぎ咆哮を上げる。翼を広げて素早く旋回すると、紫をした内翼が見えた。

「プテラ……これは、大変な相手が出てきたな」

驚きを隠せずに言ったイオは、頭上を飛ぶポケモンから目を離せなかった。

ケースケが指示を出す。直後、プテラは旋回からスピードを上げて、一気に降下。気づいたイオがエビワラーに声を飛ばした。

「れいとうパンチで迎え打て！」

エビワラーの拳に冷気が帯びる。空気中の水分が凍って、ぱりぱりと音を立てながら細かい霧になった。

プテラが翼を翻した。斜めからエビワラーの懐まで降下し、そのまま返した翼で切り上げる。石の翼は鋭利だった。構えた「れいとうパンチ」を打ち出せずに、エビワラーは腕をだらりと下げて地面から浮く。そして着地のときにエビワラーの意識はなくて、ただ全身を地面に打ち付けるばかりだった。

「さすが、強いな」

ケースケの三匹目があっさりとエビワラーを破り、続いて出てきたサウムラーと対峙する。

二人の間でならみ合う二匹。二人はほとんど同時に声を上げた。そして、ほどなくして決着がつく。

「まさか負けるとは思わなかったぜ」

四人はポケモンセンターに集まっていた。バトルが終わってすぐのときは、イオも悔しそうにしていたのだが、ポケモンセンターに戻ると、さすがに吹っ切れたようだった。

「まあ、相性もあったよな。俺だって勝てるとは思ってなかったし。にしても、イオは強いね」

と言うと何故かユウが喜ぶ。にやにやと顔を綻ばせて、ほら見ろ、っていう顔をする。そのイオに勝ったのは俺なんだよね。そう言いたいのを我慢する。

「旅をするには、ポケモンも強くないとな。旅は道連れ世は情けつてやつだ！」

「さすが、イオだね！」

何が情けで何がさすがなんだろう。微妙に意味が違うような気がするイオの語彙にも、そろそろ慣れてきた頃で、ケースケは適当に頷いて流した。

「じゃ、俺は予定通りヒウンシティに行くぜ！ 世話になったな、またどこかで会った時はよろしく！」

子どもたちは剣を交わす【1】

第二章 子どもたちは剣を交わす

1

「ケースケさん、こっち向いてください！ ピース、ピース！ はい、にーって、にーっ」

イオと別れて数日経った。ようやく迎えた本日、スクール対抗大会の一回戦。その当日。ライモンシティのビッグスタジアムに入った三人は、いきなりカメラの少女に出くわした。面食らった三人はその場に立ち尽くして、言葉を発する間もなくフラッシュを浴びた。もちろんケースケの顔は赤くて、なんだこれ、なんだろう、などと考えながらピースしてたらさらにフラッシュを浴びる。嬉しそうに一眼レフが角度を変えて踊った。気づくとユウもアイもレンズの範囲から抜け出している。それでもケースケは被写体だった。

「笑顔が引きつってますよ！ …… あ、ごめんなさい。もう、いいです。ありがとうございます」

やっと終わったのか。ケースケが脱力したところで、さらにフラッシュが焚かれた。

アカリがいたずらっぽく笑った。

「その、久しぶりだね」

「うん、久しぶりですね、ケースケさん。今日は応援に来たんですから、絶対勝ってくださいね！」

わざわざ自分を応援するために旅を中断してライモンシティに来てくれた、それだけでケースケの頭は沸騰しそうになった。その上、大事そうにカメラを抱えているのは、一眼レフがよっぽど大事なものだからか、それとも……などと考え始めて、はっとする。

ユウが気持ち悪いくらいにやにやと笑っていて、アイの方は呆れ

ているのかむすつとしていた。

その時、場内アナウンスが流れた。暑い中お集まり頂きまして云々。各校の代表は控え室に向かうように云々。第一回戦の開始時刻は云々。

「ケースさん、始まりますよ！」

「あ、うん。か、勝ってくる」

一回戦くらい余裕で勝つてこようと思っていたケースは、思わぬところで緊張しなければいけなかった。アカリが観えていて、しかも応援してくれている。そろそろ慣れる、と自分に言い聞かせても、いや、それは無理だ。

「じゃあ、行ってくる！ また後でね。ユウとアイも後で会おう！」
無理やりに自分を鼓舞して控え室に向かう。ユウとアイにはついでのように言ってしまったけれど、笑ったりしてるのだからお相手だ。

さつさと控え室に入ろうとしたらアイが横に並んだ。

どうしたの？ そう聞いてみると、アイは不機嫌そうに言う。

「私、ライモンスクールの代表なの。知らなかった？」

んなもん知ってるわけないだろ。

確かに出会った場所はライモンシティとヒウンシティをつなぐ四番道路だったし、アイはライモンシティ側から来ていた。旅というのは恐らく修行の旅。同行してきたのも目的が全く同じだったからだ。考えてみれば、代表であつてもおかしくなかった。

スクール対抗大会なんて余裕で優勝するつもりだったケースだったが、こんなところに思わぬ強敵が居た。その強敵が横に居るせいで、控え室に響く係員の案内もろくに理解できない。

「じゃ、行ってくるから」

「え、どこに？」

は？ と、返ってくる。

「何も聞いてなかったの？ 私はAだから一番最初。ケースケはDだから次。ちゃんと聞いてなよ」

そうなんだ、うわのそらで返事をした頭にはアカリとアイのことがぐるぐる回っている。片や恋で片やバトル。同じ女の子が相手なのはどうしてこうも違うのか……。もしもバトルの相手がアカリだったら、ケースケは緊張して絶対に勝てないだろう。逆にアイがバトルの相手じゃなくて……。いやいやいや何を考えているんだまったく。でも、そうだったら全く緊張はしないんだろうな、と思う。

控え室のモニターにはバトルの様子が映っていた。右のモニターにはAのスタジアムで、アイが映っていて、傍らにはお得意のコジヨンドがいた。バトル開始の合図が鳴り響く。同時にコジヨンドが駆け出すと、カメラの角度が変わって、斜め上から俯瞰するカメラになる。「ねこだまし」で相手のイシズマイを威嚇すると、あとはケースケと同じように回避とカウンターの戦術だった。

一方Bのスタジアムはマラカッチとハーデリア。早くもハーデリアが倒されて起き上がれなくなっている。マラカッチの方は全くの無傷だ。モニターには相手を倒して得意気なマラカッチがズームアップされているばかりで、パートナーの姿は映されていない。

控え室でマラカッチとそのパートナーを称賛する声が上がった。誰しもが勝ち上がれば避けては通れない相手だと思っっているのだろう。マラカッチの強さは誰が見ても明らかだった。

ケースケは意外と楽な大会じゃないのかと思いつ始めている。アイはもちろん強敵であるに違いないし、このマラカッチだって相当な強さだ。イオみたいに能力を使わなくても強い場合だってある。尤も、イオは自分が能力に気づいていないだけで、実際は能力を使用しているという可能性もあるのだが。

ほどなくしてバトルの決着がついた。アイの方が早く終わると予想していたケースケは、モニタの様子と流れるアナウンスに少し驚いた。左のモニタ、Bのスタジアムでは、マラカッチが両手を突き

上げて涼しそうな顔で立っている。圧倒的なバトルだった。マラカツチはほとんどダメージを負わずに三匹連続で倒した。右のモニタでは続くようにアイのコジョンドが三匹目のポケモンを倒している。控え室ではもう声すらも上がらなかつた。どっちのスタジアムでも圧倒的なバトルが行われたからだろう。スクール対抗大会とはこうも実力差の出る大会だっただろうか。

続いてアナウンスがCとDの組み合わせを呼ぶ。CがAのスタジアム。DがBのスタジアムと、ややこしいがそのような配置らしい。ケースケはヘッドセットの電源を入れて、控え室の椅子から立ち上がった。頭の中にはもう、バトルのことしかない。

「お前、強いだろ」

ケースケがスタジアムの上で対峙するなり、相手の少年に言われた言葉。音の絶えない場内で唯一ケースケに向けられた言葉だ。

「強いよ。どうしてそう思った？」

「まず第一にヒウンシティの代表だからな。規模が大きいスクールは、それだけ選りすぐりのトレーナーが出てくる」

一理あるだろう。

「第二は？」

「第二に、お前、組み合わせ表を見もしなかつただろ。組み合わせ表の前ではつてたけど、お前だけは見なかつたんだよ。余裕の現れだ」

「たまたま行き違っただけだ。それは買いかぶりすぎだと思うよ」
少年は鼻で笑って答える。

「嘘だな。お前、俺がどこのスクール代表か分からないだろ？」

「シッポウスクールだ」

「惜しい。が、違う。サンヨウスクールだ。やっぱり余裕たっぷりじゃないか。君とのバトルは楽しめそうだよ」

そんな高見から物を言うようなやつ、ケースケは過去にくらでも鼻を明かしてきた。どうせまた口先だけのやつだろう、その予想は未だにはずれたことがない。

戦いの合図が鳴ると同時に、場内は歓声に包まれた。年に一度のスクール対抗大会はそれだけ多くの人に注目されているというわけだ。その規模のでかさに改めて感動する。そんな余裕を持ちながらも、ボールに手をかけると、ケースケの頭はどんどん研ぎ澄まされていった。エテボースの相手をするのはヒヤッキー。二匹の立ち振る舞いはどことなく似ているように思う。

「ねこだまし」

ケースケがマイクに向かって囁くと、一秒の間も空けずにエテボースはヒヤッキーに肉薄する。そこから初撃を叩き込んで後退。少年の値踏みするような視線を無視して、攻撃に備える。

「ヒヤッキー、ねつとうで沈める！」

左目の世界が発動する。失った色彩の代わりに、ケースケは数秒後の起こりうる未来を手にした。ヒヤッキーが右手を突き出して呼び出した「ねつとう」は、ぼこぼこと暴れながらエテボースに襲いかかる。簡単に避けられそうもない技。だが、予想できていれば、所詮正面の小範囲を埋める移動物体でしかない。当然、回避対象だ。

「左斜め上に跳躍」

戻ってきた世界で、ヒヤッキーが「ねつとう」を繰り返す。エテボースは手のような二本の尻尾でバネを作って、器用に跳び上がる。沸騰する液体を飛び越して、ヒヤッキーの頭上を確保すると、そのまま二本の尻尾を振り上げ、ダブルアタック。

少年は驚愕に目を開いた。

ケースケにとっては鼻を明かすことなんて簡単なことだ。既に同じ土俵に立っていない。ケースケは、彼のような負け知らずで来た少年少女の、さらに上の層に立っている。けれど、ずっと、気づかなかった。その層に自分以外の者がいたことに。気づいてしまった今、ケースケは下に目を向けることを知った。敗北ということを知

った。絶対的な強さなどないということも。だから圧倒的な力でねじ伏せられる相手の気持ちを理解できる。それは辛いことだ。ずっと勝ち続けてきた者にとって、唐突の敗北はこの上ない挫折だ。自分は今までその残酷な槌を降ろしてきたのだ。そしてまた、振り下ろす。

わかるか、おい、これが敗北、挫折なんだよ。

控え室から出てロビーに出ると、三人が待っていた。

バトルの結果は言うまでもない。ケースケのエテボースは無傷で三匹をねじ伏せた。バトル前に饒舌だった少年は何も言えない。あれだけの分析力を以てしても、今の状況が理解できないといったふうに立ち尽くしている。ケースケも何も言わずにスタジアムを去った。勝ち上がるとは、こういうことなのかと思った。幾人もの相手に、無慈悲で残酷に槌を振り下ろしていくことだったのかと。

「どうしたの、ケースケ。勝ったんだからもっと喜べばいいのに」「そーですよ、アイさんの言うとおりです！」

いつの間にかアイとアカリは仲良くなっていたらしい。考えすぎだったかもしれない。勝った者にできることは、これから先も負けないことではないのか。負けた相手に何かしてやるなんてことはできないのだから。

「ま、当然だよな。俺は負けないよ」

「相手が私でも？」

アイが言った。そう、それが問題。スクール対抗大会はトーナメント形式で、変則的な組み合わせになっている。Aの二人のうち勝ち上がったものがCで勝ち上がった相手と、そういうふうにはバトルの相手は一グループ飛ばしながら組み合わせられていく。ケースケとアイが当たるのは決勝だった。

「わかんないだろ。だから決勝で戦おうぜ！」

なんだかアイと決勝の舞台で戦うことを想像すると楽しくなってきた。沸き上がる場内の中央でアイと向かい合って真剣勝負。勝つか負けるか分からない本当のバトル。それだけで勝ち上がる価値はある。

「当然でしょ！ 負けないでよ。私の相手になるのなんてケースケくらいだから」

どこか嬉しそうに言うアイの横では、アカリがどうしてだか不満そうな顔をしている。

「ケースケさん、突然ですけど、私もケースケって呼んでいいですか」

「え」

まさか不満の原因はそんな些細なことだったのか。四人の間に微妙な空気が流れた。ユウが相変わらずにやにやと笑っていて、アイは全く笑ってない。怖い。

「い、いいけど」

突然恥ずかしくなってきた、言えたのはそれだけだった。それでもアカリは嬉しそうに微笑んで、ケースケの頬はちょっとだけ熱を帯びた。

「や、やつぱり、ケースケくんって呼ぶことにします」

「え、うん」

「ケースケくん」

「なに」

「すごく照れる。恥ずかしい。」

「あーもう！」

アイが口を挟んできた。

「ほら、まだバトル残ってるし、観戦していきつ。はやく」

「えっ」

有無を言わずにケースケは腕を掴まれて、観戦スタンドに引っ張られていく。

さすがのケースケも、この状況の意味が分からないわけではない。
でも、なんだか現実じゃないみたいだ。

ていうか、アイも、えっ？

何か不満なことがあるだけだよな。ケースケはそんな結論を出した。

子どもたちは剣を交わす【2】

2

「ねえ、もしかして、つけられてない？」

スクール対抗大会の一回戦を終えて、アカリと別れたケースケたちは、ホドモエ方面に歩いていった。二回戦まで日が空くから、それに修行を兼ねてのことである。二回戦の会場はホドモエシティで、バトルは広々とした冷凍コンテナを借りて行われる。昔、プラスチック団が一部のコンテナを占領していたせいで、本来の使用ができなくなったコンテナをスタジアムとして改良したものだった。

日も暮れかけてきて、三人はそろそろホドモエの跳ね橋に差し掛かるうとといったところ。アイの一言で三人は立ち止まるのだが、後ろを振り向くことができない。ケースケもさつきから背後に視線を感じていたし、注意深く周囲の音を聞くようにしていたら、普通の通行人がたてないような音が聞こえた。三人が立ち止まったことで、後ろで靴を擦る不自然な音がした。正面ではいきなり立ち止まった三人を不審そうな目で見る橋守がいる。

「俺もそう思ってた」

顔を動かさずに小さな声で言う。このままホドモエの跳ね橋に入って、奇襲でもかけられたら逃げ道は正面にしかない。挟み撃ちの可能性もあるのだから、迂闊に橋を渡るのは止めておいたほうがいい。

「どうするの？ このまま知らないふりして橋、渡る？」

「正面に敵が待ち伏せしてたら逃げられないよ」

ユウがそう答えると、アイは困ったように唸った。

襲われる心当たりと言えば、やはりあのことが。ケースケの脳裏には、三元院とかいうあまり思い出したくない男の名前が浮かぶ。

二人もそれ関連の何かを思い浮かべていることだろう。つけられる

理由なんてそれくらいしかない。

「そうだ」

思いついた。

「正々堂々と勝負するってのは？ 試し岩のときの下っ端程度なら、十人くらい出てきても余裕だし」

「敵の人数も実力も分からないのに、そんなことする？」

「でも、どうせ追われるなら、早めに対処した方がいいんじゃないか。応援呼ばれたりしたら、面倒だし」

それから少しの沈黙。橋の上で飛び交うスワンナやコアルヒーの鳴き声が木霊する。橋の下には流域面積の広い川が流れていて、涼やかな小波の音がここまで聞こえてくる。

「僕はそれでいいと思う」

「じゃあ、私もそれでいい」

ユウが言つて、アイも続く。

「よし、じゃあポケモンを出すと同時に振り向こう。せーのっ」
モンスターボールの開閉スイッチを押して地面に落とした。同時に三人は振り向く。暇そうなトレーナーたちがその辺をうろろしている。草むらがある。木が立ち並ぶ。隠れることのできる場所はどこだ。トレーナーの中に隠れるのが一番か。いや、トレーナーなら行きで見たからだいたい覚えていて。だから、そこじゃない。だとすれば、木の陰だ。

「エテボース、木の裏を探せ！」

道路を囲うように並んだ木のうち、左の方にエテボースは跳んだ。いないようだ。アイのコジョンドが右に行く。そして、一鳴き。そこに敵は居た。

「え」

アイが消えそうな音で口を開ける。コジョンドが何かに吹っ飛ばされた。ここからだとして死角になっていて木の裏が見えない。走りながらも慎重に、敵の居る方へ向かう。回り込むと木の裏には、元々白土色をしていたような、くすんだフードの人間が二人。デスマス

を模した仮面で顔を覆って、露出をなくしている。その二人はエテボースとコジヨンドを従えていた。

。思わず息を呑んだ。エテボースと、コジヨンド。それは、まるで

敵のエテボースが襲いかかってくる。心臓が跳ねた。慌ててヘッドセットに電源を入れて、左目が別の世界を捉えるのに身構える。

しかしその世界は、ケースケのエテボースがダブルアタックを受けて吹き飛んでも、まだやってこなかった。

敵には能力が通じなかった。

エテボース同士が掴み合う。少し離れたところでコジヨンドも同じようにしている。どこか現実から浮いてしまったような光景で、ケースケは固まったまま動けなかった。頭の中が空っぽになる。夢を見ているときのように、何の思考もなく時が進む。

逃げよう。

誰かが言った。アイとユウが視線を向けてくる。そのときになってやっと、逃げようと呟いたのが自分なのだと分かる。

「ケースケ、こいつら、おかしい！ 逃げなきゃ！」

何もできないまま、ユウは叫ぶ。同じポケモン同士が取っ組み合っているのに割って入ることはできなかったようだ。だって、二匹があまりにもそっくりだったから。たとえ種族が同じでも、個体ごとに差はあるからトレーナーなら見分けることができるのが普通だ。でも目の前にいるのは、鏡の向こうから出てきたのかと思えるほど、そっくりな外見をしていた。だからどっちを攻撃すればいいのか、分からなくなる。

「逃げなきゃ」

自分が呟いたのだと思っただら今度はアイだった。うるんだ目で不思議な光景から目を離せないでいる。口が震えていた。ケースケも似たようなことになっているかもしれない。

ケースケはボールを出した。エテボースに向けて赤い光線を放射すると、下になっていたエテボースが戻ってくる。

橋の方へ走っていたユウを見つけて、ケースケは追いかける。アイが後ろからついてきた。さらに後方には、フードが二人。悠然と歩いていて、慌てる素振りはまったく見せない。

橋に一步踏み出したあたりで、橋守が何ごとか叫んでいた。ライブキヤスターを持っていたような気がする。

気づくと辺りは暗い。日が落ちて、夜空に負けそうなくらいの小さな灯りが、橋を照らすばかりだ。振り返ると薄闇を背負ってフードの二人が歩いている。どうしてだか距離が離れていかないような気がした。

横に並んで走るアイが細い音を喉で鳴らしている。その音がケースケの恐怖をより一層かき立てた。先を走るユウが振り向いて、チラチーノをフードの二人にけしかける。

「もつと早く！」

汗が頬を伝って、足下の薄暗い橋に落ちる。どんどん闇が深まってきた、ずっと向こうにある橋の終わりがとてつもなく遠い場所のように思えた。

目をこらすと向こうからも人が走ってくる。二人だ。その二人の間には、逃げる人を追うくらいの距離がある。

やはり、挟み撃ちか。

めまいがしてきた。それでも足を止めてしまえば、追いつかれてしまう。振り返る。闇があった。追いかけてきているのは、闇なのか。

「助けてください！」

前方から女の子の声が聞こえた。視線を向けると、女の子が逃げてきている。どうやら追われているようだ。

女の子がユウの元に着くと、ユウは立ち止まった。ケースケとアイの二人もそこまで来て、女の子が誰に追われていたのかに気づく。フードで、仮面。そいつは後ろから追ってくる二人と違う外見をしていた。男か女かも分からない。年齢だって分からない。

「お前ら、なんで、追いかけてくるんだ」

息を切らしながら、はき出した声は少し震えていた。せり上がってくる恐怖のせいか、忙しく動く肺のせいか、分からない。前にいるフードは無言のまま立っている。暗闇に溶けてしまうのではないかと思うほど、その存在は希薄に見えた。後ろも追いつかれて、四人は挟み撃ちにされた。

不意に強い光が放たれる。女の子がモンスターボールからポケモンを出したのだ。出てきたのはムーランド。暗めの体毛は夜に馴染むが、足下まで届く白ひげは辺りが暗くてもはつきりと見えた。

それを追うようにして、新しい光が発生する。出てきたのはムーランドだ。背筋を何かが撫でていくようだった。ぞわりと怖気に襲われて、一瞬だけ平衡感覚を手放した。そこには全く同じ外見のポケモンたちがいる。それぞれが向かい合って、ないはずの鏡がそこにあるかのように。

だめだ、と思った。こいつらと戦ってはいけない。能力が効かない上に、得体の知れない格好、持っているポケモンはこつちと全く同じで、ゆっくりと盤を埋めるように追い詰めてくる。

「逃げよう」

ユウが言った。

「ムーランド一匹くらいなら、やり過ぎせそつだよ。一斉に走ろう」
フードの三人は、追い詰めておきながら、静観したまま何もしてこない。声を上げるでもなく、ただひたすら夜と共に気配を薄めて佇んでいる。

「行こう！」

ユウが叫んでチラチーノをムーランドにぶつける。三人と三匹はそれに続いて、走り出した。フードの横を抜けて、ホドモ工方面に何の妨害もしてこないフードに驚いて、ケースケは拍子抜けして後ろを振り向いた。フードの三人は時が止まったみたいに、その場から全く動いていない。姿勢も向きも一切変わらずに立っている。そこには違和感があった。

走っても走っても離れていく気がしなかったフードたちの気配は、

こつち側に来てみると全く感じなくなっていた。ケースケは三人がゲートに入ったのを確認して、自分も身体を滑り込ませようとしたが、一度止まった。

恐怖を感じない。振り返ってみようかと思った。しかし、止める。振り返っても、そこにはもう、誰も居ない気がした。

「私、ケイって言います」

女の子がそう言った瞬間、ユウとケースケは固まった。

ホドモエシテイに着いた四人は、ポケモンセンターに入った。ロビーで休みながら話をしていて、女の子が自己紹介をしているところだった。女の子の黒い長髪がソファの背に流れている。暗い橋の上では気づかなかったが、麦わら帽子を被っていた。色白で目がぱつちりとしていて、桃色の薄い唇で微笑む。こういう子が男子にモテるんだらうなあ、とケースケは率直な感想を抱いた。見るからに清楚だ。

格好は水色のワンピースに、フリンジ付きのモカシンブーツを合わせている。カーキ色の靴が少し汚れているのは、長い道のりを歩いてきたからなのだろうか。長い道のりを歩くのにモカシンブーツのような柔らかい靴は合わないから、どうしてなのだろうかと思った。「一応、ブリーダーをやっつて、ちょっと不思議な能力があるんです」

「不思議な能力？」

これにはアイが食いついた。

「はい。ポケモンに触れると、その子を回復してあげることができません。あと、心を通わせれば、ポケモンの言いたいことも分かるようになります」

どうして女の子　ケイは、能力のことを言おうと思ったのだろう。ケースケたちは能力者だから、こういう能力があってもおかし

くないと納得できるが、一般人が聞いたら距離を置きたくなるような内容だ。そんな疑問を口にしようとは思わなかったが、ケイは先回りして答えた。

「あなたたちも、能力者ですよね？ 私、分かるんです。触ってみると、この人、能力者だなんて」

いつ誰に触ったのかは分からなかったが、この子にはそういう能力もあるらしい。

「そうなんだ。ユウは能力者じゃないけど、私とケースケは能力者ねえ、もしかして、イオもバトル向きじゃない別の能力を持っているんじゃない？」

最後の問いはケースケとユウに向けられたものだ。

「あ」と、思いついたようにユウが言う。

「そういえば、イオってポケモンの食べ物でも美味しそうに食べてたよね。ほら、逆立ちしながらパフォーマンスしてた……」

それを聞いて思わず吹き出した。

「そんな地味な能力に、俺の目の能力は相殺されたのか」

つまり、それが本当ならば、派手な能力から地味な能力まで様々あるが、相殺するならどんな能力でも可能というわけだ。

「えっと……」

気まずそうにケイが呟いた。

「あ、ごめん。君、ケイちゃんって言うんだよね？」

そう言っユウが確認する。

「はい、ケイです」

「そうなんだ……」

呟くとユウが苦笑した。アイは何のことだか分からずにきよとんとしている。ユウに「初恋の相手？」と聞いて、「馬鹿」と罵られていた。ユウには珍しい。

まあ、それについてはケースケもアイを罵ってやりたところなのだが。

「ケースケってのは、あだ名なんだ。本当の名前はケイ」

そう紹介したら、アイは目をまん丸くしたかと思うと、すぐに声を上げて笑い始めた。

「ごめん、初恋の相手」

「だから違うってば！」

「同じ名前ですね！ よろしくお願いします、ケースさん！」

ケースさんと呼ばれて、アカリを思い出した。活動的で丁寧な口調にちょっとだけ、仲の良い相手にするような口調が見え隠れするのがアカリ。ケイはおっとりしていて育ちが良さそうな物腰で、丁寧な口調がまったくぶれない。いつの間にか、ケースケは女の子をアカリと比較してしまう癖がついたようだ。顔が熱い。

「あ、ケースケ、顔が赤くなってる。初恋の相手って言われて、満更でもないとか？」

アイがとうとう腹を抱えて笑い出した。

必死になつて否定するユウが軽く頭を叩いたら、横腹に蹴りを食らって返り討ちにあっていた。ケースケも何か言おうとしたのだが、それを見て止めておくことにした。

「よろしく、ケイちゃん」

二人を無視してケイと握手した。

「やっぱり、能力者なんですね」

その笑顔にはどこか見覚えがあるような気がした。アイと握手したときと同じように、どこか懐かしい。いったい自分は女の子を誰と重ねて考えているのだろう。思い出そうとしてみても何一つ浮かんでこない。たとえば、三年前の思い出を語って、と言われても咄嗟には出てこないのと同じだ。思い出はふとした瞬間に、何かと関連づけて思い出されて、そういえばあの時はこうだったよね、と言う。思い出そうとして浮かぶ記憶じゃない。浮かんでからそれが思い出なのだと思います。そういうものだ。だからいつか、思い出すときが来るのかもしれない。

いつか。思い出したときには、何か、変わるとでもいうのか。それとも勘違いなのか。能力者同士の潜在的な共感とか？

ロビーのテレビがニュースに切り替わった。
それは、ポケモンセンター連続襲撃事件についてだった。

子どもたちは剣を交わす【3】

3

夕飯にしよう、と決めたはいいものの、外に出たらまた襲われるのではないかという不安があつて、四人は気が気でなかった。それでも街の中で襲ってくるなんてことは、まずないだろうと判断して外に出る。

ホドモエシティ。ホドモエのマーケットを中心に、色んな物が行き交いしている。食べ物から戦闘補助のドーピング剤まで、様々なものが流れる。多くの物をとどめておくには、それ相応の保存機関が必要になるため、街の四分の一ほどのスペースを占める冷凍コンテナがあつても不思議ではない。昔はそんなコンテナを利用してプラズマ団がアジトを張っていたこともある。プラズマ団を蹴散らした後に通常どおり、コンテナとしての機能を使えるかといえば、もちろんそんなことは決してなかった。コンテナとして物が保存できなくなってしまう、アジトだったコンテナは、その広さを利用して食堂になっている。冷房の範囲を調節すれば、食堂として使うにこれ以上の場所はなかった。

「コンテナって言うからどんな秘密基地かと思つたけど、結構広いんだね」

コンテナ食堂に入るなり、ユウが言った。確かに天井も高いし、外装に反して内装は綺麗に改造されている。広さだけを見るなら、人を運ぶためのコンテナなのではないかと疑ってしまうほどだ。

「プラズマ団がアジトにするくらいだもんね」

アイがそう返した頃に、ウェイターが近寄ってくる。

食堂はバイキング形式になっていられるらしい。料金は先払いで、後は席や食器など、すべて客に委ねられる。

四人は適当に席を取って、バイキングの列に並んだ。コンテナ食

堂は結構な人で賑わっている。業者のような制服を着ている人だったり、マーケットの昨今について真面目な議論を繰り広げる人だったり、仕事で来ている人が多いのかもしれない。

「あ、えっと、私、あっちの方に並んでるから」

「なんだか落ち着きがない様子でアイは列から抜けていく。」

「あっちって何があんの？」

「分かんない」

「飲み物じゃないでしょうか。ポットが並んでますけど」

確かにポットが並んでいるのは見えるが、その先は人の列でよく見えない。こっちで食べるものを取ってからにすればいいと思うのだけれど。

あ。

「どうしたの？ ケースケ」

気づいたら思わず声が洩れていたらしい。目の前にあるのは Pasta だ。それもただの Pasta じゃない。タツツの スミ Pasta。ケースケの大好物だ。お腹が鳴りそうになるのを無理やり抑えて、トレイを持つ手に力を込める。スミ Pasta は人気があるようで、他の Pasta に比べて量もかなり減っている。

「あ、スミ Pasta か。ケースケ好きだもんね」

「好きなんてもんじゃない。これ以外の Pasta は Pasta じゃない。」

ハスタだ」

「ハスタって何」

「私が Pasta だと思っていたものは、実はハスタだったんですねー」

「ケイちゃん、真に受けちゃだめだよ！」

そういうわけで、取り皿にスミ Pasta を大盛りにして取る。真っ白な皿に、黒の Pasta はやけに目立った。

それから自由に食べたいものを取って、バイキング形式を最大限に利用してから席に戻った。

あとはアイを待つだけだ。

「お、お待たせ」

戻ってきたアイは頬をちよつとだけ赤くしていた。声もなんだか緊張しているように思える。

「え」

「……あら」

ユウとケイが驚いた様子で声を出す。その視線の先を追ってみると、アイの手元に行き着いた。

「アイ、それって……」

「い、いいいいじゃない！ 別に！」

顔がますます赤くなった。トレーを置く手には必要以上に力がこもっていて、テーブルに着くときには食器のぶつかり合う大きな音がした。

トレーには取り皿がところ狭しと載っている。そのどれもが、夕飯には不釣り合いなほどカラフルだった。全部、ケーキだ。

「いや、いいけど、それって夕飯になるの？」

「もちろん……なる。ほ、ほら、食べよ」

「そんなに早くケーキが食べたいのか」

「そういうことじゃない！ ああ、もう！ 私、食べるから！」

顔を赤くしたままフォークをケーキに刺して、ものすごい勢いで食べ始める。語気が強まってるのはたぶん照れ隠しだったのだろう。ケーキを口にする度に幸せそうな顔になる。それを無理に隠そうとするから変な顔になっている。ケーキも好物のスミパスタを一口食べる。

「おい、アイ。変な顔してるぞ」

「ケースケに言われたくない。ケースケなんて餌を貰ったヒヤップみたいな顔してる」

「アイなんてコダツクに惚れたオタマ口みたいな顔してるぞ」

「本当だ、そっくりですね……」

「似てるか！」

ケースケとアイの声が重なった。

「二人とも、仲が良いのは分かったから……」

「何？ ユウは嫉妬？」

「嫉妬なんてするわけないだろっ！」

場はますます荒れた。そんな言い合いはウェイターが注意に来るまで続けられた。

ようやく静かになったところで、食事を再開。ケースケはさつさとスミパスタを食べ終わり、二皿目のために席を立つ。アイはケースケのために二つ目のトレーを用意しているところだった。

皿を持って列に並ぶ。スミパスタはもうほとんど残っていないかった。あと一人分くらいだろう。スミパスタの目の前まで進んだところで、トングを持った手を伸ばした。

アルミのぶつかり合う軽い音がした。

ケースケの横から同じように手を伸ばすやつがいた。そいつのトングと、ケースケのトングがスミパスタを前にしてぶつかり合っている。

「俺のだ」

相手の低い声が威嚇してきた。だが、スミパスタを前にしたケースケは全く動じない。

「いいや、順番的に見ても俺だろ」

「いいじゃねえかよ、オタマロ。お前もういっぱい食っただろ」

「オタマロじゃない！ ヒヤップだ！」

「ああ、猿のほうだったか」

「ああヒヤップでもねえよ！ とにかく、順番を守れ。これは俺のだ」

一方的に言ってスミパスタを取ろうとするが、相手はトングを武器にして阻止してくる。

弾いた勢いそのまま、相手がトングを伸ばそうとするが、ケースケもそこは退かない。手首のスナップを利かせてトングを払う。

「なかなかやるじゃねえか」

相手が笑った。

「そっちなかなかのトング捌きだ」

「まあ、実力の半分も出してねえけどな」

「俺は一割も出してないね」

「本気で行くぞ！」

トングの動きが凄絶を極めた。アルミのぶつかり合う音がスミパスタの上で飛び交う。風切り音が鳴る。トングの片側を叩くと、翻った相手のトングが下から叩き上げてくる。そのままスミパスタに向かうトングを、手首を回して払う。真剣すぎる二人は、まるで剣を手にして決戦に立つ騎士たちのようだった。

一進一退の攻防が続く中、突然スミパスタが消えた。

「なっ」

二人とも驚きを隠せない。横を見ると爺さんがいた。持っている皿の上にはスミパスタがある。

「まだまだ青いな。わしの動きについてこれんとは」

爺さんは笑いながら去って行った。

二人はその場に固まった。今のは何だったのだろう。夢から覚めたような感覚で立ち尽くす。

「おい、ヒヤップ」

「ちがう、ケースだ」

「じゃあ、ケースケ。飯食ったら仲間と一緒に俺んとこ来い。後ろの方の席に一人でいるから」

「ぶっ、ぼっちかよ」

「うるせえ。いいから後で来い」

「何やってたの？」

席に戻るなりアイが聞いてきた。スミパスタのために血を血で洗う戦いを繰り返した末、爺さんに漁夫の利を得られて泣きを見たことは口が裂けても言えない。

「別に。スミパスタがないから踊ってただけだし」

「知らない人と二人で？ トング持って？」

それ以上の言い訳は苦しかったので無視した。テーブルの上を見ると、みな既に食事を終えている。ケースケはなんだか申し訳なくなった。

「もう食べ終わった？ 終わったらあいつのところに行こう。呼ばれてるんだけど」

指をさす。その方向には、茶髪をワックスで整えた少年がいる。白黒ボーダーの七分袖シャツに青いジレを合わせている。カーキ色のジーパンはロールアップしていて、エナメルの白いサンダルとの間で肌が露出していた。見た目はおしゃれで、モデルのようだ。

「ちよつと待つて、もうちよつと食べたい」

「まだケーキ食べるのかよ！ 太るぞ」

叩かれた。

「本当に太りそうだからちよつぱりいいや。ほら、行こ」

アイとケースケのやり取りを見て、ユウとケイは微笑んでいる。こつちとしては不本意だ。ケースケはむすつとした表情のまま立ち上がって、トレーを返却用の棚に持って行ってから、茶髪の少年が座る席に向かった。

「ああ、ちよつぱりな」

茶髪の彼は、ケースケたちを目の前にして、いきなりそんなことを言った。向かい合うケースケは、彼に泣きぼくろがあることに気づいた。

「俺はアルだ。よろしく。……で、お前たち、能力者なんだろ？」

ケースケたちは言葉に窮した。何も喋れないでいると、アルは話を続ける。

「言わなくてもその反応で分かる。どんな能力かは知らないけど、ちよつと協力してほしいんだ」

「何？」

ようやく口を開いたのはアイだ。ふざけるような調子はない。少しばかりの警戒心が見えるくらい。

「今、このコンテナは敵に囲まれてる。狙いは恐らく俺だろう」

「敵って？ あんた、何したの」

アルはテーブルの上に置いてあるティーカップを口に持っていつて、黒い液体を口に含んだ。

「ポケモンセンター連続襲撃事件。二件目に襲撃されたのがどこか、覚えてるか？」

ここ最近、ニュースを見るとだいたいポケモンセンター襲撃事件についてだった。だから嫌でも覚えている。一件目がフキヨセだから、二件目はここ、ホドモエだ。

「ホドモエでしょ？」

アイが確認するように言うと、神秘的な面持ちでアルが頷く。

「正解。その襲撃があった直後、俺は逃げようとする犯行グループを叩きのめした。コンテナの周りに張ってるのは、そいつらだ」

「それはまた、剣呑なことだ」

他人事のように言ってみたら、アルは嫌そうな顔をした。

「前はよかったが、今回はたぶん俺一人じゃ手に負えない。相手も馬鹿じゃないだろうからな。だから、ちょっと協力してくれねえか」

そうは言うものの、もしかしたら狙われているのはケースたちのほうかもしれない。アルはケースたちがポケモンセンター襲撃事件に関わっていることを知らないのだ。

「でも、なんでその犯行グループだって分かるのよ」

「それが俺の能力だから」

へえ、とアイは言った。

「お前たちに得るものがないのは分かるけど、なんとかしてもらえないか。頼む」

「えっと、どうしよう。話した方がいいと思うよ」

ユウの提案にアイが同意したので、ケースは自分たちが事件に

関わっていることを説明した。

少し肌寒くなってきたような気がする。冷房が効きすぎているのか、長居するのには向いていないようだ。肌をさする。

「なんだよ、だったら俺たちはまとめて狙われてるのか。じゃあ、ここを出るときは覚悟して出よう。奇襲が来るかもしれないからな」

アルが立ち上がった。彼の背は結構高い。が、年齢はそんなに変わらないように見える。ケースケはほとんど直感的に同い年なのだろうと思った。なぜか初めて会った気がしないのは、スミパスタを取り合った仲だからだろうか。最近是人と会う度にそんな懐かしさを感じてばかりだ。自分の感覚なのに、どうしてそうなるのかが分からない。まるで、その感覚を完全に理解するための心に、鍵がかかっているかのようにだった。

あるいは、その鍵をかけたのは自分なのかもしれない。

子どもたちは剣を交わす【4】

4

外は静かだった。少し寒いような気もする。それは冷房の余韻か。それとも漂う緊張感のせいか。五人は声を出さないまま街の外れに向かつて歩いて行く。街中で襲撃されてしまったら、一般人を巻き込んでしまう可能性がある。

周りはコンテナだらけだ。視界に人の姿はないが、気配ばかりが漂っている。確実につけられていた。

少し広めの場所に出た。それから振り返る。

「囲まれた。そろそろバトルの時間だ」

茶髪を掻きながらアルは言った。楽しそうに笑っている。

足音が聞こえた。一つ、二つ。敵が姿を現してくる。試し岩で襲ってきた敵と同じ格好をしている。何も言葉を発しないまま、十数人もいる彼らは周りを囲み、最後に一人の男が出てくる。それには見覚えがあった。ケースは、またか、と思った。

「久しぶりだね、諸君。プラズマ団の意思を継ぐ組織の象徴的存在、そう、ぼくが」

「あ、マゾヒストだ」

「そう、M……じゃない！ 三元院だ！」

三元院は憤った。相変わらず服のコーディネートはモノトーンで統一されている。夜に混じってめんどくさいから正直やめてほしい。

「それはそうと、今日は重要なお知らせがあつてね」

周りをしっかりと囲っておいてそれはないだろう、と言ってやりたかったが黙っておく。

「ついに我らが組織の名前が決まったのだ！ 聞いてひれ伏せ！

我らはプラズマ団の意思を継ぐ サンゲン団だ！」

三元院の隣にいたやつが思いっきり吹き出した。

「何がおかしい！」

三元院はケースケたちに向かって叫ぶ。だが、五人が笑いもせず引いているのを確認して、隣にいたやつが笑っていたのだと分かると、「笑うな！」と言って叩いていた。なんだか可哀想になってきた。

「なあ、帰りたいたい」

アルがそう言うのも無理はない。なぜならケースケも帰りたかったからだ。

三元院が咳払いをした。

「さて、サンゲン団の象徴的存在のぼくが、二度も出張ってきたのには訳がある。君たちの勧誘だ。どうだい、ビジネスをやる気にはなれないかい」

「やだ」

ケースケは試し岩の時と同じように即答した。

三元院も答えを予想していたのだろう。さして感情の起伏があるわけでもなく、指をパチンと叩いた。

「仕方ないな。やっぱり君たちには消えてもらうしかないようだ」

そこら中で光が生まれた。夜の幕を切り裂いて、コンテナの外装を照らし出す。出てきたポケモンはレパルダス。あの時、芸がないと言ったのはイオだったか。確かに芸がない。しかし数が多い。

「甘いな。もつとだ」

三元院が周囲を見渡して、コーヒーに砂糖を入れるかのような調子で言った。さらに光が生まれる。ケースケたち五人もポケモンを出して対抗する。

「俺たちも二匹くらい出した方がいいな。三匹になると慣れてないだろ」

アルが言ったのを合図に、二匹目を繰り出していく。相手はレパルダスとワルビルの群れ。対するこちらは、ケースケのエテボースとブレラ、アイのコジョンドとゴチルゼル、ケイのムーランドとメブキジカ、ユウのチラチーノとエルフーン、そして、アルのマラカ

ツチとペンドラー。

「なかなかの精鋭揃いだな」

アルが味方のポケモンを眺めて息を吐き出した。

「さあ、かかれ！」

三元院の指示が飛ぶと同時に、ワルビルとレパルダスは一斉に襲いかかってくる。

試し岩の時とは違う統率された動きだった。陣形がある。ケースケの左目が夜の闇色を反転させた。音が消える。

白の中でレパルダスが動く。同時に動き出すのではなく、タイミングをずらしての波状攻撃を目論んでいるようだ。それならば素直に一匹ずつ叩いていけばいいだろう。恐らく一匹一匹の能力は大したものじゃない。その弱さを数で補おうとしているようだ。

地上をエテボースに任せ、跳び上がるレパルダスにはプテラが対応する。ワルビルは誰かに任せよう。相手が仕掛けてくる手順、動き、そこから導き出される攻撃の答えを覚える。

さあ、戦闘の開始だ。

再び周囲に闇が満ちた。音が戻る。

地を蹴ったレパルダスをエテボースが迎え打つ。爪を振って闇を裂く、つじぎり。ヘッドセットを指示が通った。エテボースは地面に這いつくばるようにして避けて、下からのダブルアタック。舞い上がるレパルダスを無視して、敵が集まっているところに突っ込む。その行動は意表を突いた。陣形を作って襲いかかるはずのレパルダスは、いきなり突っ込んできたエテボースに戸惑っている。近くにいた敵めがけて、得意技を当てる。状況に対応し始めたレパルダスが背後から襲おうとするのは予測済み。エテボースはしゃがんだ。頭上を辻斬りが通り過ぎて、振り返りざまにローキック。素速さを落とす技だ。レパルダスの動きが鈍くなり、その背後を取ってダブルアタック。レパルダスの周りをちょこまかと動くせいで、相手も同士討ちを懸念して攻撃を躊躇う。その隙を突いて、エテボースは自らの速さを最大限に利用する。手のような尻尾で地面を掴み、あ

り得ない態勢から次々と攻撃を繰り返して出し、レパルダスを叩いていく。しかし、相手もそこまで弱いわけではない。一撃で沈めることはできない。だから、仕上げが必要だ。

エテボースが敵を一通り叩いたのを確認する。最後に、向かってくるレパルダスに向かって、とんぼがえりを繰り返した。一カ所にまとまったレパルダスを尻目に、エテボースはケースケの手元に返ってくる。

それまで大人しくしていたプテラが上空で大きく羽ばたいた。直後、中空の闇に生まれた岩の塊。それらは雪崩となって容赦なくレパルダスの集団に降り注ぐ。いわなだれ。その一撃でケースケが手にしていたレパルダスは一匹残らず倒れた。

「くそつ、ますます仲間を引き入れたいね……」

三元院の声は震えていた。

ケースケが相手をしてきたレパルダスだけじゃない。他のレパルダスも、ワルビルも、あつという間に倒されていく。これが能力者の実力だ。能力者と一般人ではこれほどまでに差が生まれる。

「さあ、これで仕上げだ！ マラカッチ、はなびらのまい！」

アルの叫び声を合図に、宵闇を背負って紅い花びらが舞う。残っているのはワルビルのみ。これを受ければ確かに終わりだ。それを悟ったワルビルたちは、技が発動する前にマラカッチを潰そうと試みる。

だが、間に合わない。

風の音がした。空気の引き裂かれる音、それからワルビルの悲鳴が続いた。

舞った花びらが鋭利な刃物のようになって、ワルビルを襲っていく。一匹も近づけない。近づかせない。優雅に舞う花びらが、ワルビルの身体を削っていく。風が止んだその時に、立っていられるワルビルはいなかった。

ふう、と誰かのため息が聞こえた。涼しいと思っていた夜は、すっかり暑くなっている。

少しの沈黙を破って、三元院が口を開いた。

「一度やられているだけあって、仕方ないね。ここまであっさりやられたのは、残念だけど。まあ、収穫がなかったわけでもない。また何処かで会おうじゃないか」

子どもたち。

三元院はそう言い残してレポートでさっさと消える。

用意周到に現れて、それでもあっさりやられて帰って行く。彼の目的は本当に勧誘をすることなのだろうか。それはもちろん、三元院の頭の中にしか答えがない。

残された下っ端たちも慌てて逃げていった。もはや追いかけるのも馬鹿馬鹿しい。

ケースケは、その場に座り込んだ。空を見上げると、月が出ていることに気づいた。

「結構強いね」

ポケモンセンターのソファに沈み込みながら言ってみると、マラカッチが「はなびらのまい」で敵を蹴散らす場面が浮かんた。確かに強かった。相当レベルが高いに違いない。

「強いに決まってるだろ。ホドモエスクールの代表だからな」

「えっ、なんだって」

ソファから顔を離してアルを見る。彼は、してやったり、と言うかのようにほくそ笑んだ。やはり同い年だったのだ。それも、限りなく近い存在の。

「ていうことは、別に旅をしていたわけじゃないんだね」

ユウが話に入ってくる。ユウが言うように、なぜか旅をしていて、たまたま立ち寄っているのだと思いついてきた。考えてみれば、街で会った人は普通ならば街の住人であると考えるのが当然で、旅をしている人だと考えるのは、感覚がずれてきている証拠でしかなか

った。自分が旅をしているからって、同年代の他の子どもが旅をしているとは限らないではないか。

「あ、そうか！」

ユウが勢いよく言った。

「マラカツチだ！一回戦のときにアイと同じ時間の組み合わせだったやつ！」

アルが満足そうに笑う。

控え室のモニタ。アイのコジヨンドが奮闘する横のモニタで、マラカツチがハーデリアを無傷で倒しているところが浮かぶ。トレーナーの顔ではなくマラカツチがズームで抜かれていたのを覚えてい

る。

「あの時のか……」

「あら、皆さん、もしかしてスクールの代表なんですか？」

「えっと、ぼく以外は代表みたい。しかも一回戦は余裕で勝ち上がってる」

ケイの問いにユウが答えると、アルの表情から笑みが消えた。

「お前らも代表だったの？ なんだよ、スター気分には浸れると思っただのに」

「性格悪いな。さっきのバトル見ただろ。俺たちは強いよ」

「強いのは認めるけどな。俺が性格悪いっていうのは認めない」

「ねえ、ちょっと」

口を挟んできたのはアイだった。笑っていない。

「そんな悠長に言い合いしていいの？ 私と同じ時間にやってた試合ってことは、アルの次の相手ってケースじゃない？」

え、と思わず驚いてしまったのはアルも同じ。アイを相手にする前に思わぬ強敵が立ちはだかった。同じ能力者。つまり、能力は使えない。

おもしろくなってきたじゃねえか。アルが笑いきれない表情で言うけれど、とてもじゃないがそんな気分にはなれなかった。

また、負けてしまう？

そんな不安が、ずっと胸の内側に貼り付いてはがれない。

子どもたちは剣を交わす【5】

5

二回戦の会場はホドモエシティだ。かつてプラズマ団のアジトになっていた冷凍コンテナ。使えなくなった冷凍コンテナの一部は食堂になったが、もちろん他の用途に使われるようになったコンテナは一つではない。そのうちの一つが、スタジアムとして改装されていた。ポケモンバトルができるほど広いコンテナって何だろう、と考えながら、会場に入ってみると、そこは食堂なんかよりも断然広く、観客席を設けられるほどだった。それでもライモンシティの会場ほどではないのだが。

「はい、ケースくん、ピースピース」

アカリは前の会場で会ったときに言ったとおり、「ケースくん」と呼ぶようになった。それがどこか照れくさくて、自分でもぎこちないと分かるようなピースをする。すぐ横でアルが格好つけてポーズを取るのが鬱陶しいけれど、アカリの姿を目にするとそんなことどうでもよく思えた。

アカリが応援に来てくれている。ライモンシティの会場で撮影した写真を現像して持ってきてくれた。そこに写るケースは、引きつった笑みを浮かべて、誰がどう見ても緊張していた。脱力した隙を撮られた写真もある。どれもアカリが撮ってくれたものだ。見ていて顔が紅くなるのも我慢して、しげしげと眺める。何枚かある写真のうち、一枚だけ、自然に笑っている写真があった。アカリを抜けた三人で写っている写真だ。それを見てふと思う。アカリが入った写真は？

「あのさ」

「たまたまなくなって口を開く。」

「アカリちゃんは、写真に入らないの？」

シャッターを切る手が止まった。

「うん……でも、私は、写真家だし、三脚があればいいけど、ないですから」

弱々しく笑うのを見て、無理しているのだということはすぐに分かった。これだけ人がいっぱい居るのだから、撮ってもらうのくらい任せればいいのだ。でも、もしかすると……。ちよつとした疑問が湧く。

「その一眼レフ、他人に触られるのが嫌とか？」

その言葉の意図するところを理解したのか、アカリは先取りして話した。

「それもあります。でも、入っていいんですか？ だったら、サブのカメラがあるから、こつちなら……」

「入っていいに決まってる。集合写真を撮ろう！」

任せとけ、と言ったのはアルだ。なぜか綺麗なお姉さんを捕まえてきて、写真を撮ってくれるえように頼んでいる。何が任せとけだ。呆れたのは恐らくケーススケだけではないだろう。

それからケーススケ、アイ、ユウ、ケイ、アルに加えてアカリが入る。綺麗なお姉さんは、見た目に違わない艶のある声で合図をして、集合写真を撮ってくれた。意識はしなかったけれど、自然に笑えていると思う。アルは当然のように決めポーズをとっていた。身体を斜めに構えて右足をタップダンサーのように上げ、顔を少し俯けて左手を添える。どうやらそれが本人の決めポーズらしかった。

「アルの格好、おもしろい」

「おもしろい？ 格好良くないか？」

アイがくすりとせせずに言った言葉を真面目に受け止めている。

「なんで格好つけるの？」

「そりゃ、写真に収まるんだから、格好良くないと」

身だしなみを気にしているだけあるというものだ。

時間を確認しようとしたところで、アナウンスが聞こえた。そろそろ二回戦に出場する人は控え室に行かなければならない。

「あ、そろそろ。ケースくん、頑張ってください！」
「お、おう」

二回戦に出場する三人が控え室に向かって歩いて行く。その後ろを何故かケイがついてきた。前回もこんなことがなかったか？ 実はアイが代表だったとか、そんなことが……。

「まさか、ケイって」

「なんですか？」

微笑んでいる。

「スクール代表なの？」

「はい、そうですよ」

首をかしげてさらに微笑んだ。

三人が揃って、「え」と驚きの声を洩らす。

「うふふ、冗談ですよ。三人とも頑張ってきてください」

思いつきからかわれた。

「ケース、お前、アカリちゃんのこと好きなんだろ」

控え室に入るなり、アルがいきなりそんなことを言ってきた。

「ば、ばかやろう！」

アカリの顔が浮かんだ。好き？ いやいやいや、確かに可愛いし、可愛いし、告白されたのは嬉しくて、ああ、そういえば告白されていたんだ！ それはつまり向こうは自分のことを間違いなく好きということ、だったら、なんだ？

「おい、どうした。顔が真っ赤だぞ。オタマロの次はオクタンかよ」
「だからヒヤップだって！ ……って、ポケモンにたとえるな！」

さりなげく頬に手を当ててみると、いつもより熱くて、手は冷たかった。慌てて頬から手を離すと、アルが笑い出し、アイはむすつとする。

「わかりやすいな」

「わかりやすいんだよ、ばーか」

アイが暴言を吐いた。それに振り返ってアルがまた笑う。

「アイの方も分かりやすいんだな」

「なっ、何のこと!」

「お、言っつていいのか?」

「ば、ばか、言わないでよ!」

「どっちなんだよ」

アイのほっぺも頬を染めている。アルがすごく楽しそうなのは、ちよつと腹立たしいけれど、何の話をしているのか全く分からないのが、なおさら腹立たしかった。でも、分かりやすいつて、やっぱりアカリのことが好きだと思われるのだろうか。そんなことを考えていたら、またしても係員の案内を完全に聞き逃した。

スクール対抗大会の第二回戦を始めます。本日の一試合目に出場する選手の招集をします。招集された選手は、速やかに移動してください。ヒウンスクール代表・ケイクン。

今しがた聞こえたアナウンスによれば、前回とは違って出番は最初らしい。まずはケースケの名前が呼ばれた。この会場はライモンシティの時ほど広くないので、進行は一試合ずつだ。招集もアナウンスが丁寧に選手の名前を読み上げてくれる。ライモンシティのときは、試合に出場する人、とまとめられていた。

「じゃ、勝ってくる」

それから対戦相手の名前が呼ばれる。

ホドモエスクール代表・アルくん。

「……本当にそうだったのか」

そうでなければいいのにな、と思っていたのだが、やはり相手はアルだった。見ると不敵な笑みをこぼしている。

「そういうわけだ。俺も勝ってくるぜ」
アルが先に控え室を出て行く。

スタジアムが歓声に沸いた。それは中央に足を踏み入れた時だった。

ライモンシティの時よりも人数はすくないはずなのに、より大きな歓声に聞こえるのは、天気技のために少しだけ天井が空いているとはいえ、コンテナが比較的閉じられた空間だからだろう。反響する声に酔いそうになる。

「まさか、ケースケが相手だとはな」

それでもアルが張り上げた声は聞こえた。低くてよく通る声だ。敵かな気持ちで、二人は向かい合っている。

「どっちが勝っても、恨みっこなしだからな」

「いいや、それは間違ってる。試合が終わっても俺を恨むなよ？」
へへっ、とアルは笑った。試合前の軽い挑発の応酬。なぜだかそれも心地よい。懐かしいような、昔からある居場所に帰ったような、そんな優しい感覚。ジャッジがマイクを持った。少しずつスタジアムの歓声が引いていく。感覚が研ぎ澄まされていった。すべてをこのバトルのために、集中する。

合図と同時にスタジアムが再び歓声に沸いた。

弾ける二つの光。エテボースとマラカッチがスタジアムに立つ。

ヘッドセットのスイッチを入れた。

「つばをつく！」

まずはアルの指示が飛んだ。マラカッチが両手を広げ、勢いをつけて自分の身体をつく。対象が自分であるから、ねこだましを仕掛けようとするエテボースよりも早く技は決まる。「ねこだまし」を当て、エテボースは退いた。

スタジアムの熱気のせいかな、わずかに覗く太陽のせいかな、それと

も季節外れの厚着のせいから、首筋に汗が流れた。

互いに指示を出さないから、距離を取ったままにらみ合う。

「どうした、攻めてこないのか？」

「そっちこそ、攻撃してこないのか」

「じゃあ、遠慮なく。アルが言った。」

ソーラービームだ！

ためが長い技なんて、エテボースには当たらない。無駄だ。そう思った。

しかし、ケースケの予想は打ち碎かれる。

左目の能力が発動しない。これは予想通りだった。だが、次の瞬間。

マラカッチは一瞬の構えから、蛍光がかった緑の光線を放射する。声を上げている暇なんてなかった。慌ててエテボースに回避の指示を出す。光線が空を走った。空気を焼く嫌な音がして、エテボースの身体を光線がかする。

沈黙のタイミングを挑発で伸ばしてる間に「にほんばれ」をしたのか。

気づいたときにはもう遅い。二発目のソーラービームが飛んでくる。指示に従ってエテボースは跳躍した。光線を通った道のすぐ脇に着地。振動する空気に怯まず、エテボースが距離を詰める。

マラカッチの素速さではエテボースについてこれるはずがない。

それは自惚れだったのだろうか。

繰り返したダブルアタックは僅かにマラカッチをかすっただけだ。「ようりよくそだ。晴れの時に素速さが倍になる。ポケモンの研究くらいしとけ。能力に頼るなよ」

アルの挑発に、ケースケは苦虫を噛みつぶす。どうしようもなく正しい。

素速さでも力でも劣る。エテボースにできることは少しでもダメ

ージを与えること。そう割り切つて、考えを改めた。

近すぎる距離からのソーラービーム。同士討ちにすることは恐らくできない。ごめん、一言呟いて、指示を出した。

ダブルアタックがマラカッチを叩くのと同時、ソーラービームがエテポースを宙に運んだ。二匹は勢いのままにぶつ飛ぶ。一撃で沈みはしないが、かなりの痛手だ。それを見て、ピンチの時に使うと決めていた技の名前を思い浮かべる。

一瞬でも隙があればいい。マラカッチを見た。膝をついたままだ。今しかない。

「とんぼがえり！」

重い身体に鞭を打ち、エテポースは肉薄した。マラカッチは回避行動を取ろうともせず、そのまま攻撃を受けた。戻ってきたエテポースの代わりにライチュウを繰り出す。効果抜群の技を受けたマラカッチは耐えられまい。入れ替えが行われる。そのはずだった。

「いいのか？ 相性はあまりよくないぜ？」

マラカッチは立ち上がった。

「どうして……ダブルアタックと、とんぼがえり。耐えられるはずがないのに」

「失望させんなよ。上を見てみる」

日差しが強い。日本晴れ。視線を戻してマラカッチを見る。太陽がマラカッチを照らしていた。

すぐに立ち上がらなかつたのは、「こうこうせい」をしていたからか！

完全にアルの掌で踊らされていた。ライチュウでマラカッチを相手にするのは難しい。けれど、マラカッチだって弱っているはずだ。ソーラービームを繰り出そうとするマラカッチに「ねこだまし」を浴びせる。続けざまに攻撃を指示した。ライチュウの拳に電気が集まる。音を立てて空気が弾けた。

素速さはやはりマラカッチの方が上だ。距離を見れば、次の攻撃は避けられないだろうと思える。

もし、今能力が使えるなら、世界はどんな光景を示す？

賭けだった。本当は見えていない。数秒先の未来は見えない。それでも数瞬先の未来を脳裏に思い浮かべた。能力を使う時と同じように、ヘッドセットを通して指示を出す。

光線が放たれた。汗が頬を流れ、ケースケは唾を飲み下す。ライチュウが避ける先に、光線の軌道はかぶらない。避けた。マラカッチの顔に焦りがにじむ。そこへ叩き込む攻撃。電気を纏った拳がマラカッチを叩いた。

「まずいな」スタジウムに響くあらゆる音の中に、ぽつりと洩れた声。それは目の前の相手から聞こえた。恐らくばれている。彼は気づいている。今の技が「かみなりパンチ」を装った「でんじは」だということに。

少しでも隙があれば、また「こうこうせい」をされる。その前に決めなければ。

一瞬で考えを巡らせ、ライチュウに「はかいこうせん」を指示した。それと同時にスタジウムに舞い始める紅い花びら。

ライチュウが光線を放つ。目に痛いような極彩色の光がマラカッチ目がけて、一直線に走った。舞う花びらが規則性を持って動き出す。風を切った。鋭利な音の連続。それから一点を目指して花びらが収束する。

やられた、と思った。

次の瞬間、マラカッチは光線を受け、立ち上がれなくなった。しかし、既に標的を襲い始めていた花びらは、ポケモンの素速さとは関係なく攻撃を開始する。刃物のように研ぎ澄まされた花びらが、ライチュウの全身を切り裂いていった。両者とも倒れる。

「やるね」

アルがそう言ってポケモンを戻すと、ジャッジはマイクを取って実況する。場にはエテボースとペンドラーが現れた。

お互いに残るポケモンは二匹。能力者同士の戦いは続く。

子どもたちは剣を交わす【6】

6

おい、ケースケ、また俺の勝ちだ！ もっと強くなってくれよ！
弾けるような明るい声だ。誰がそう言ったのか、思い出せない。
でもそんなことを何度も言われていた時期がある。それはつまり、
負け続けていた時期ということだ。

強い風に目をしかめた。細かい砂が顔に当たる。手で覆った隙間
から見えた彼は、どこかぼんやりとしている。この強い風の中でも
一切怯まず、両手を頭の後ろにやって笑った。指の隙間から見えた
彼の顔は、口から上が見えなかった。

いつか、ケースケが俺に勝つ時も来ちゃうのかな。

彼は空を見上げる。風に吹かれた髪が後ろに流れる。その時、な
んて返しただろう。分からない。けれど、彼はこっちを向いた。
きつと、何年先も戦っていよう。勝ったり負けたりして、俺たち
はそうやって生きていけるんだ。それが俺たちの人生。そうだ、

が、人生の。

空気を震わせる音の塊。スタジアムに満ちた歓声は、ケースケを
含めた二人に注がれている。

定石通りにエテボースの「ねこだまし」が決まって、それからペ
ンドラーを相手に対峙する。

「さっさと終わらせてやるよ」

ハードローラー！

アルの指示が飛ぶのと同時に、ペンドラーは動き出す。重量感の

見た目に騙されてはいけない。エテボースに匹敵するほどの速さで接近してくる。

「まずい……まもる！」

ペンドラーが跳躍。エテボースの頭上を捉えて丸くなる。大砲玉のようだ。のしかかってくるのを「まもる」で防ぐ。弾かれたペンドラーは手前に着地。そのまま、二又の尾を振り回して、ポイズンテール。寸前にヘッドセットからの指示で回避した。エテボースも尻尾で地面を掴んで、身体を捻る。

「ダブルアタック！」

「同じ技ばかり。残念だ」

ペンドラーの甲殻に伸びる手型の尻尾。背後を取って一撃、それから、二撃。

アルの笑う声が聞こえた。

飛び退こうとしたエテボースが動けない。頭がじん、と熱を持って目眩がした。やられる。目の前でペンドラーに押さえられたエテボースがいる。その態勢から苦しそうに視線をこっちへ向けている。ケースケは口を開いた。あ、と小さく洩れた。何かを言おうとして、それが何なのか分からなくて、口は震えるばかり。エテボースの顔が悲しそうに歪んだ。

ふっ、と笑ったアル。メガホン。指示を出した。

零距离からの容赦ない攻撃。すぎるような視線を向けたままのエテボースが、強力な大技を受け、地面を弾んで動かなくなる。

歓声が聞こえた。大きな音の濁流が耳の中をかき回し、脳をぐらぐら揺らす。眼前に横たわるエテボース。相棒。すぎるような目はもう閉じられている。

能力に頼るなよ。

アルの声がもう一度聞こえた気がした。

能力に頼りすぎていた代償だ。ワンパターンな戦術でも勝てたあの頃とは違う。これがバトルだ。自分にバトルの腕前なんてものはないに等しかった。

次のポケモンを出さなきゃ。

モンスターボールにエテボースを戻す。赤い光になってボールに収まる。次の、次の、ポケモン。ボールを取り出す。あ、思ったときには遅かった。震える手ではしっかりと持つことができなくて、開閉スイッチを押す前の小さなボールは、下に落ちて少しだけ転がった。

「どうしたんだよ、ケースケ。つまらないまま終わらせるなよ」

全身が冷えている。それなのに汗は止まらなかった。落ちたボールに手を伸ばすと、同時に汗が垂れた。震える手でなんとか掴んで、放る。負けるかもしれない。負けるかもしれない。そんな考えが頭の中を渦巻いている。

三匹目、それは大会のルール上で最後のポケモンを示す。このポケモンがやられた瞬間、ケースケの負けは決する。

「そうか、プテラだったな。でも、簡単には負けないぜ。さあペンドラ、いわなだれだ！」

いきなりプテラの弱点を狙った攻撃だ。頭上に集まる岩の塊を避けながら飛行する。生まれた風はケースケの髪を撫でた。

ヘッドセットを通して指示を出す。まずは旋回。プテラの頭上を岩が生まれては落ちてを繰り返しながら追いかけてくる。落下すると地面で割れる。また発生。そして、落ちる。次の攻撃に移るその瞬間、旋回に勢いをつけて急降下。ペンドラーの懐まで沈み、翻して切り上げる、つばめがえし。アルが目を見開いたその眼前では、重量のあるペンドラーが宙に浮いている。プテラの後ろで、いわなだれが落ちた。同時に再び飛び上がる。

「まだ、終わりじゃないぞ！」

「ほお。そういうのはペンドラーを倒してからにしてほしい」

ひっくり返っていたペンドラーはまた立ち上がる。今度はケースケの方が驚いた。

まだ立ち上がるのか。弱点の技を受けてなお。恐らく二度目は通じないだろう。別の策が必要だ。今の状況から導き出される策。能

力に頼りすぎない、純粋なバトルセンスをこの一瞬で磨かなければ、勝ち目はない。

「さあ、いわなだれだ！」

ペンドラーの方は相も変わらず「いわなだれ」だ。これは誘っているのだから。もう一度さっきと同じタイミングで、「つばめがえし」を繰り出せ。そう言っているのだ。

プテラは旋回を続ける。

「どうした、逃げ回ってばかりじゃ勝てないぞ！」

挑発。逃げ回っているわけではない。機を見計らっている。ケースケは笑った。それはペンドラーの頭上をプテラが通り過ぎた時だった。

ペンドラーが空中に岩の塊を生み出す時、どうしても避けなければいけない空間がある。ペンドラーの頭上。そこに岩を生み出すことはできない。なぜなら、岩タイプの技はペンドラーの弱点でもあるからだ。

「やばい、逃げるんだペンドラー！」

いいや、逃げ場なんてない。

ペンドラーの頭上に岩が生まれた。プテラにはヘッドセットを使って「いわなだれ」を指示した。このタイミング、ペンドラーの頭上を過ぎ、ペンドラー自身の技で、周囲を「いわなだれ」が囲ってしまう、この瞬間を狙って。

アルが今度こそ息を呑んだ。降り注ぐ岩を避けられないペンドラーは、のたうち回りながら岩を全身に受けた。もう立ち上がれない。ジャッジがペンドラーの敗北を宣言すると、スタジアムが沸いた。アルが苦い顔をして、三匹目を出そうとする。

「こいつは出したくなかったんだけど、仕方ない」

かと思えば冷静な表情になる。

「大会を通して使いたくないんだけどな」

それは冷静を通り越して、冷徹な仮面のようにすら思える。

「切り札をこの大会ごときで出すなんて、ちっとも思っていないかつ

たぜ」

ケースケ。

名前を呼ばれて、はっとする。なんだろうこの感覚は。思い出の中に手を伸ばしてくるような、思い出を二人で共有するかのようなくとも不思議な感覚。名前のつけようがない感覚に、酔いそうになる。

ボールが放たれて、光が生まれる。歓声が飛び交う中に出現したそのポケモンの名はウルガモス。六枚の赤い羽が小さな身体を守るように広がっている。黒い肌に紅の角、貫禄を備えた炎タイプのポケモン。

「初めて見た……」

驚きに包まれたスタジアムでは、ケースケの小さな呟きなど誰にも聞こえなかったことだろう。

「最後の戦いを始めよう。勝った方が、前に進むんだ」
アルが笑った。

ウルガモスは確かに珍しいうえに強い。スクールの大会程度なら、たいていのポケモンが太刀打ちできないことだろう。だが、ウルガモスだって最強というわけではない。そこまで強いポケモンでなければ、相性が悪くたって押し切れる。

観客の声援が小さくなってから既に二十分ほどが経った。それほどウルガモスとプテラの戦いは均衡していた。相性ではプテラが圧倒的に有利。それなのにウルガモスは相性を感じさせない強さだ。
「そろそろ終わりにしようぜ、ケースケ」

「負けてくれるのか？」

「はっ、冗談。お前が負けるんだよ！ ウルガモス、ソーラービーム！」

ソーラービームを繰り出すには大きな隙が

「忘れたのか？ 今は日照りだ」

最初あれだけ苦戦したマラカッチ。なぜ苦戦したのか。そうだ、全ては「にほんばれ」のせいだった……。つまり、今は、

「プテラ、いわなだれ！」

日本晴れ。天気は日照りが続いていて、ソーラービームは予備動作なしで発動する。だから、これは賭けだ。技を同時に放ち、攻撃中の隙を狙って確実に当てる。どちらが生き残るか。これで全てが決まる。

深緑色の光線が空を貫いた。歓声が上がる。岩の塊はウルガモスの羽を削り、受け身も取れずに落下する。プテラはソーラービームの直撃を受けて、地に落ちた。両方のポケモンが同時に動かなくなつて、スタジアムは静まりかえつた。

「ど、どつちだよ」

アルの緊張した声を聞いたジャッジは、それでもまだ判断できなくてあたふたしている。その時、積み上がった岩の動く音がした。岩の下にはウルガモスがいる。岩が転がると、スタジアムにどよめきが広がる。ケースケの胸中も穏やかではなかった。ウルガモスに岩タイプの技が決まれば、ほぼ決着がついたと思つてもいいくらいなのに……。だから、「いわなだれ」が無事に決まったときは安堵した。ソーラービームの一発じゃプテラは倒れないと思つた。けれど、プテラはまだ立ち上がることができない。長袖の下に冷や汗を感じる。唾を飲み下した。会場にいる全員が、プテラではなく、起き上がるかもしれないウルガモスのほうに視線を向けていた。

「立てよ！ こんなところで終われねえだろ！」

静かなスタジアムにアルの叫び声が響いた。語尾が震えていて、アルにしては表情が歪んでいる。

ごつつ、という音がした。それと同時に、ウルガモスの上に積み上がった岩が崩れていく。崩れた岩は、周囲に広がる岩の欠片の絨毯を転がる。そして、ウルガモスは起き上がった。飛ぶことはできないものの、目を開けて岩の絨毯を這っている。

スタジアムが歓声に沸き上がる。その中、ケースケはヘッドセットを掴んだ。

ジャツジがマイクを手にして、大きく息を吸う。勝敗が決まってしまう。まだだ。まだ終わってないんだ。

「終わってない！ まだ、終わってない！」

思いっきり叫んだ。その声がジャツジの宣言を中止させ、スタジアムを静まりかえらせた。

「お前の負けだ！ 認めるよ、ケースケ！」

「それなら、じゃあ！ プテラが倒れているのを確認したのか！」
はっ、と息を呑んで辺りを見渡すアル。ジャツジも同じように見渡す。だが、見つからないはずだ。倒れているプテラを見つけないとできない。さっき、ケースケは指示を出したのだ。あらゆる視線がウルガモスに向かう中で、ケースケはただの一人になるうともプテラを見続けていた。プテラが動くのをずっと待っていた。そして、起き上がるうとしたプテラに、ヘッドセットを通じて指示を出したのだ。

ウルガモスが力なく宙を舞った。何が起きたのか理解できた者は少なかったはずだ。スタジアムは異様なほど静かで、ウルガモスの描く放物線が、ひどくゆっくり描かれているように見えた。アルが目を見張る。ウルガモスの下にあった岩が砕けて散った。そこから出てきたのはプテラだった。「あなをほる」意表を突いたその技が、決まった瞬間。

割れんばかりの歓声が響いた。ウルガモスが落ちた音など掻き消されてしまう。

ジャツジが大声で勝負の終わりを宣言する。やっと終わったのだ。アルが膝を着いて安心して、ケースケは笑顔をつくれない表情で安堵する。ケースケの勝利だった。

放心した表情のまま立ち上がったアルは、名前を呼ばれることなく、スタジアムをあとにする。

弾かれてしまった剣の、拾う術を知らぬまま。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7052v/>

幻想にキコエル

2011年10月26日23時26分発行